
好きになってもいいですか...？

宇佐美拓都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きになってもいいですか…？

【Nコード】

N4064Q

【作者名】

宇佐美拓都

【あらすじ】

”初恋”

それは嬉しくてちょっぴり恥ずかしい青春の1ページ。

”初恋”

それは懐かしくてちょっぴり切ない幼き日の思い出。

”初恋”

それはこれから始まる2人だけの物語。

赤くなってもいいですか…？（前書き）

本日より投稿開始です。

予約投稿で、毎日22時・23時・0時に3話ずつ投稿されていきます。

（1月25日23時と、30日0時だけは2話同時投稿となっています）

それではごゆっくりお楽しみください。

赤くなってもいいですか…？

ドンッドンッドンッ！

バンッバンッバンッ！！

「お前らふざけんな、鍵開けろー！！！！」

ベランダに閉じ込められた林君が窓を叩いて必死に助けを求めている。

外は台風で大雨が吹きつけていて、林君はもうすでにびしょ濡れの状態。

男子はそれを見て大笑いで盛り上がり、女子はバカだなあと思いつつも心配そうにその様子を見ていた。

「あれイジメじゃないの？」

「いや、違うつしょ。林も笑ってるし」

確かに端から見ればいじめているようにも見える。

でも林君も林君で、風に乗って雨が叩き付ける度にギャーギャーと笑いながら声を上げている。

からかわれているところは多少あるのかもしれないけれど、たぶんいじめではない。大丈夫。大丈夫。

「おい、早く入れてやれよ。そろそろ先生来るぞ」

それに、こういうときはいつも水野君がやめさせてくれる。だから大丈夫。

本来それは、学級委員長の私の役目なのかもしれないけれど、男子

は私の言うことはあまり聞いてはくれない。でも、水野君が言うどれだけ盛り上がっていてもピタリと収まってしまふ。その人望が少し羨ましくも思っけれど、私にはきつと望んでも手に入れることは出来ない。

委員長だつて、水野君がやってくれたら、このクラスの男子と女子ももう少し歩み寄れると思うのに……。

「秋山」

「あつ、はい!？」

そんな風に考えている時に、突然当人から声を掛けられて、私も慌ててしまった。

「な、なに……？ 水野君……」

「委員長なんだから、注意しなきゃダメだよ?」

「あ……。ごめん……」

「べつに、謝つてほしいわけじゃないんだけど……」

「うん……。ごめん……」

水野君は「まあ、いいけど」と言い、再び男子の輪の中に戻っていた。

私は少し水野君に頼りすぎていると思う。それは事実。

特に男子のことに關しては、直接お願いしたわけではないけれど水野君がほとんど面倒を見てくれている。でも、手伝ってくれるからと言ってそこまで仲が良いわけでもない。

一年生のときに同じクラスで、三年生になった今再び同じクラスになり、一年生の三学期に一度だけ席が隣同士になった、たぶんそれが一番近い距離。

友達と言うよりはクラスメイト。水野君から見ても私はきつとただのクラスメイト。

それでも私を助けてくれる水野君は、やっぱりとっても良い人。
だから男子からも女子からも人望が厚いんだろぅなあ……。

「ほーら。席に着けー！」

先生が教室に来てホームルームが始まる。

それとともに男子の輪も消え、私の妄想時間も終わりを告げられる。

「まだ、雨が降ってるからな。みんな気を付けて帰るように」

「はい」

「あと、この後ちよつと二人くらい手伝いをして欲しいんだけど…。

委員長と、あと誰か一人手の空いてる人いないか？」

私は強制なのか…。

まったく、こういう時の委員長は本当に損だ…。

委員長という役割上、私も断ることが出来なくて「はい」と答える
しかない。

でもまあいつか…。

もう一人いれば帰りが一人にならなくて済むから…。

「あ、じゃあ俺やります」

「ん。じゃあ水野、頼むな」

ちよつと！？

何でっ！？

私はてつきり、親友の裕子が手を挙げてくれるとばかり思っていた。
だから思わず裕子の方を見てアイコンタクトを取ってみたけれど、
裕子も水野君のあまりの即答ぶりにタイミングを逃してしまつたよ
うで、手を合わせてゴメンと言いたげな表情で私の方を見ていた。

「じゃあ、秋山と水野は終わったらこっち来て。日直、号令掛けて」
「起立！」

礼をして、みんなは散り散りになっていく。

私は水野君とともに先生の後に付いて職員室へと向かった。

「これを後ろの黒板の上、これは教室の掲示板、これは廊下に貼って」

先生の手伝いというのは、掲示物の張替えや授業で書いた作品の掲示だった。

「終わったらそのまま帰っていいからね」

「はい」

「じゃあ、よろしく」

職員室を出た私達は、両手にいっぱい掲示物を抱えて三階の教室へと戻る。すでに教室には誰も居らず、さっきまであんなに賑やかだったその空間はとても寂しく見えた。

「もうみんな帰ったみたいだね」

「うん。なんか静かだね」

「誰もいないほうが、俺は良かったかな……」

国語の時間に書いた習字の作品を名前順に並べ替えながら、水野君はポツリと言った。

「何で？」と聞き返してみたけれど、答えは無かった。

無視されたわけではなくて、答えに困って、言葉が出てこなかった

感じ。

だから余計になぜなのかが気になったけれど、たぶん聞いてはいけないことなんだと思い、私もそれ以上は聞かなかった。

「秋山つて…男子のこと苦手なの？」

しばらく無言のまま作業を続けていると、水野君のほうからそんなことを聞いてきた。

「そんなことないけど…」

「けど？」

「私が言っても、あんまり聞いてもらえないし……」

「そんな風に思ってるから、みんなも秋山のことが分からないんだよ」

怒られた…？

同級生のクラスメイトの男の子に怒られるなんて思ってもいなかったから、私は目を丸くしてしまった。

「あ、いや…そういうつもりじゃないんだけど……」

「うん…。でも、私、水野君に色々頼っちゃって任せちゃってる…」

「いいんだよ、そんなの。俺が勝手にやってるだけだから…」

水野君は手を止めて、少し俯き加減に「そうじゃなくて…」と何度か呟いた。

でも私には、何がそれで何がそうじゃないのかは分からない…。とにかく何か困らせてしまったのなら謝りたいし、こうやってまた手伝わせてしまっていることも申し訳なかった。

「ごめんね。裕子に言えば手伝ってくれたと思うんだけど、手伝ってもらっちゃって…」

「また謝った。それやめなよ」

「うん。でも頼ってばかりだし、今日も用事とかあったんじゃない？」

「こんな台風の日に用事なんか無いよ。それに、俺が自分から手を挙げたんだし。」

秋山は何も悪いことしてないし…。とにかく、謝るの禁止な！」

「うん」と返事はしてみたものの、じゃあ何と云えばいいんだろう…。

悪いなと思ってる私の心の中には、ごめんなさい以外にそれに当てはまる言葉はない。

でも、それを言ってしまうと、さらに水野君を困らせて迷惑を掛けてしまう。

じゃあ私はどうすれば…。

モヤモヤとした気持ちのまま、私は黙々と掲示物を張り替えていった。

二人でないと出来ない作業はもう無かったから、私は教室内、水野君は廊下と手分けをして作業を進め、すべてが終わった頃には雨も上がり、雲の切れ間からは橙色の夕日が力強くその輝きを私達に届けていた。

「あーっ、疲れたっ…！」

「水野君が手伝ってくれてよかった。…ありがとう」

ニコツと「どういたしまして」と返してくれた水野君に、私は何かを見つけたような気がした。

憧れていたのはこの優しさ。羨ましかったのはこの笑顔。

夕日に染められた教室と私達。心がその橙で満たされると自然と体

が温かくなつていくのを感じる。

「帰ろつか」

「えっ！？ あっ……うん」

熱を帯びた橙は、次第に赤へと変わり始めるのだった。

忘れちゃってもいいですか…？

「あれ…俺、教科書忘れたかも…」

「ん。水野が忘れるなんて珍しいな。」

「しょうがねえから、ジューズ一本で見せてやるよ」

「ちえっ…。まあ頼むわ…」

無遅刻無欠席。成績はトップクラス。授業中も積極的に手を挙げる水野君が教科書を忘れてしまうなんて…。

聴くつもりはなかったけれど耳に入ってきたその会話。水野君でもそういうことはあるんだなあと思いながら、私はその様子を見ていた。

「おい。早希ー？」

「えっ？何？」

「プ・リ・ン・ト。後ろにまわして」

「ああ…ごめん」

ついその様子に見入っていた私は、前の席の裕子が腕だけを後ろに向けてピラピラとプリントを振っていたことにも気付いていなかった。すぐにプリントを受け取り、後ろの席の子に渡す。

私が前に向き直ると裕子は今度は半身でこちらを向きながら、「こないだ、一緒に帰ったんだって？」と、小声で私に言ってきた。

いつ…？誰のことだろう…？

裕子以外で一緒に帰った相手…。

ひとつだけあった心当たりに気付き、何だかそれを見られていたことが急に恥ずかしくなって、私は裕子から視線を外し、小さく「うん」ただけ答えた。

「付き合ってんの？」

「違うよ…。ただ一緒に先生の手伝いしてて、だからその流れで…」
「ふーん」

先生の視線を察したのか、裕子は話を切り上げて前を向いた。

それ以上掘り下げられたくはない私も授業に集中しようと筆箱からシャープペンを取り出し…。

手に取ったそれは私のものではないシャープペン。

でも、どこかで見覚えのあったシャープペン。

誰のものは思い出せないけれど、間違えて自分の筆箱にしまってしまったのかもしれない。

でも…誰のだろう…。

しかし、まさか授業中に持ち主を探すわけにもいかず、休み時間に聞いてみればいいやと、私はそれをもう一度筆箱の中にしまい直し、板書を写し始めた。

「これ、落とした人いませんかー？」

教壇に立ち、休み時間で賑わう教室全体に届くよう、少し声を張る。気付いた子が何人かこちらを向いてくれて、でも自分のものではないと確認すると、また話に戻っていく。

「それ、水野の」

もう一度聞こうとしたところで、私の後ろで黒板を消していた大村君が言った。

「渡しといてやるよ」

「あ…じゃあ、お願いします」

直接本人に渡せばよかったのだけれど、どこへ行ったか、水野君は教室には居なかったから、私は大村君にシャープペンを預けて、渡してもらうことにした。

それにしても、なぜ私の筆箱に水野君の物が入っていたのだろう…。それだけは、持ち主が分かってても謎のまま…。

まさか、無意識のうちに手が勝手に…。

いやいや、そんなことはあり得ない。

でも、本当に分らない…。

机を並べてグループワークをしたわけでもないし、同じ部活や委員会というわけでもない。

テストの時にどちらかがどちらかの席に座ったということもない。一体どこでどうやって…。

「あ、秋山、ありがと。拾ってくれたんだって？」

「あ、うん…」

「昨日から見当たらなくてさあ…。どこにあった？」

「えっ…と……」

私の筆箱の中。

まるで私が隠していたかのように思われてしまっただろうか…。

「そつか。俺、間違えて入れちゃったのかな。

まあいいや、ありがとね」

「うん…」

冗談にも清々しくはないやり取り…。

でも、まあいいやと気にしない素振りをしてくれただけ私も救われた。

それに、こんなことにあまりこだわっていても仕方がない。

早くジャージに着替えなければ、次の体育の授業に遅れてしまう。
私は席を立ち、後ろのロッカーにジャージを取りに向かった。

バサッ

ロッカーからジャージを取り出した瞬間、丁寧に畳んであった上着とズボンの間からバランスを崩して、それは落ちた。

私の脳裏に、シャープペンの違和感がよみがえる。これは絶対に私の数学の教科書ではない。

だって、さっきの数学の授業、私は自分の教科書を自分の机から出して自分の机にしまったから。

この教科書の持ち主は、名前を確認せずとももう分かる。
さっきの授業で教科書を忘れたのは一人だけ…。

私は落ちた教科書を拾い上げロッカーの上に置くと、ジャージをロッカーに戻して教室を出た。

「あれ、早希？どこいくの？」

「ちよつと…保健室」

心配して声を掛けてくれた裕子にも、私は作り笑いさえ出来なくなっていた。

頭が重い。気持ちが悪い。めまいがする。

三つが同時に襲い掛かって、私の精神力さえ虫食んでいく。

ふらふらと保健室に辿り着き、先生に症状だけを伝えて、すぐにベツドに横になる。

私はやってない…。

私は入れてない…。

私は盗ってない…。

でも、きつと誰が見ても、私以外に犯人は居ないのだろう。
盗るだけならともかく、自分の持ち物の中に隠すなんて。

記憶にはないけれど、自分で自分のしたことが信じられない…。

校庭のほうから、笛の音が聞こえる。

今頃、みんなは球技大会に向けて練習をしていることだろう。

球技大会・体育祭・文化祭の三冠を獲るんだ。と、特に男子は張り切っていたから。

でも、こんなことがバレたら、そんなクラスの雰囲気も壊してしまうかもしれない。

これは夢なんだ。

そう思いたい。

そうだ、少し眠ろう。

そうすれば、目が覚めたときには何かが変わっているかもしれない。出来るだけ周りの音が聞こえないように布団を頭まで被り、私は目を閉じた…。

謎が解けてもいいですか…？

「僕…健…員…で…、

秋山…の…が気…って…」

声が聞こえる…。

優しい声だなあ…。

だれの声だっけ…。

あれ…？

私はどこにいるんだっけ…。

「寝てるみたいね」

あ、この声は分かる。保健の先生の声だ。
そっか…。四時間目の体育の授業を欠席して、保健室で休んでたんだ。

「じゃあ、起こさないほうがいいですね。

先生にも大丈夫そうだって伝えておきます」

あつ…。行ってしまう…。

待って…！

あなたはだれ…！

「あつ…」

「あつ…」

早希が布団から顔を出すと、そこには水野が立っていた。
お互いにそう言葉を発したまま、次の言葉がなかなか出ず、視線を

合わせることも十数秒。

「起きた？」と保健の先生が水野に問いかけ、ようやく水野が次の言葉を発した。

「あ、はい。……大丈夫？」

「何で、水野君が……？」

「俺、保健委員だから。校庭に行ったら秋山だけ来てなくて、心配になったから……」

「今……授業中……？」

「いや、もう昼休みだよ」

どうやら、早希は丸々一時間近く眠ってしまっていたようだ。しかし、早希が授業中かと勘違いをしてしまうのも無理はない。水野はジャージ姿のままで、さっきの言葉だけを取れば、居ないことに気付いて授業を抜けて来たように思っても仕方がなかった。

「なんか、俺、今日ツイてないんだよ……」

教室に戻ったらＹシャツが無くてさあ……。だからジャージのままなんだ」

なるほど、そういうことだったのか。

早希は水野の言葉に納得した。

給食は制服に着替えてから食べる決まりになっていたから、早希がいくら考えたところで、筋の通る答えが出るはずがなかった。

しかし、Ｙシャツが無くなってしまったのは、それはそれで災難だ。クラスの人気者の水野に限って、誰かに隠されてしまったなどとは考えにくい。逆に、水野のことを好きな女子が授業中の教室に侵入して盗んでしまった。その方が可能性はある。

いや、しかし、それはそれでそんなことをする女子がいるなんて思いたくはない……。

シャープペンといい、数学の教科書といい…。

早希はそこまで考えて、表情を曇らせた。

「どうした？」

「私…自分が分からない……」

突然そんなことを言われてしまった水野は明らかに困惑していた。悩み、苦しそうな表情の早希に、何か言葉を掛けてあげたい。しかし、何と言ってあげればいいのか分からない。ただ、無力感だけが水野の心の中に残された。

「ペンも教科書も…私は入れた覚えはないんだけど…」

でも、私のところにあつたから…たぶん、私なんだと思う…」

「えっ…？どういうこと……」

「盗ったとかじゃなくって…。でも、わかんないけど…」

私のところにあつたから…。自分で気付かないうちに……」

早希の心によぎる不安。

もし、Yシャツが自分のロッカーやカバンに入っていたらどうしよう…。

そうなってしまうば、もう言い逃れは出来ない。

水野からの信用を失う。いや、クラス全体からの信用も失うだろう。どうかありませんように…。

それが変な願い事だとは分かっているても、そう願わずにはいられなかった。

「秋山は、そんなことしない」

「えっ……」

「あ、いや、その、違う…。
あの…いや…でも…秋山じゃないと思う…」

咄嗟に出てしまった言葉を慌てて取り繕ってはみたものの、水野の顔は真つ赤になり、早希もそんな水野に「…ありがとう」とだけ言つて、隠すように口元まで布団を被つた。

「失礼しまーす。先生！ちょっと修羅場にしまーす！」

なんとという挨拶か。

しかし、その声は早希にも水野にも聞き覚えがあつたから余計に恐ろしく感じていた。

「水野、早希は？」

「ああ…ここに…」

シャッ！

声の主は勢い良くカーテンを明け、早希を上から覗き込んだ。

「大丈夫？」

「杏ちゃんと裕子…と…」

「犯人だ」

カーテンを勢い良く開けたのは上原杏。その隣には今野裕子。二人は早希の親友だから、早希にもすぐわかった。

しかし、クラスメイトではない女の子が一人。

だが、早希がその子の名前を知るのには、そう時間は掛からなかった。

「お前ら何してんの…？ てか、犯人って何？」

「水野は分かるよね。あんたの元カノ。この子が犯人」

「梨沙が犯人って、何の…？」

「この子が早希のバッグにあんたのＹシャツ隠してたの」

水野は耳を疑った。そして早希も耳を疑った。

そして、「もしかして…」と同時に言い掛けた二人を遮るように、梨沙が口を開いた。

「Ｙシャツだけじゃないし、ペンも教科書もだし」

その開き直ったかのような言い方に、二人は啞然とし、言葉を失った。

「あたしがボール取りに戻ったら、丁度この子が中に居てね。

何してんのかと思ったら、水野のシャツを早希のバッグに入れてるでしょ。

ホントはそこで捕まえてやろうかと思ったけど、私もすぐ戻らなきゃだったし、

今まで待つて、それで連れて来たってわけ。

まさか、余罪があるとは思わなかったわ…」

「杏ちゃん一人でも力負けはしないだろうけど、私も念のために、ね」

確かに、身長１７０ｃｍを優に越えるバスケ部キャプテンの杏と、身長１５０ｃｍ台と思われる梨沙では、力でねじ伏せようと思えば、どうにでもなるような歴然とした差があった。

「水野が悪いんだよ。」

私かもう一回やり直したいって言ってるのに、その子と帰るから」
「俺は、その気はないって言ってるだろ」

「まあ、そっちの喧嘩は後でやって。それよりも、早希に謝んな」

しかし、梨沙に謝る様子はなく、「ふん！」とそっぽを向いたそれっきり。

呆れる杏と裕子だったが、当の早希は冷静で、「分かった」と言い、ベッドを降りた。

「ここだと迷惑掛かるから、戻ろう？」

「ちよつと早希、いいの？」

「いいよ。私も紛らわしいことだと思う」

「そうやって、良い人ぶつてるところが余計ム力つくんだよ……！」

梨沙は杏と裕子を押しのけて、一人保健室を出て行ってしまった。すぐさま後を追いかけようとした杏も、早希に止められ、それ以上は諦めた様子で、四人はやるせない思いを抱きながら教室へと戻った。

筆箱に入っていたシャープペンの謎も、ロッカーの中のジャージの間に挟まっていた数学の教科書の謎も、消えたYシャツの謎も、すべて解けた。

しかし、早希の心は晴れなかった。

梨沙のことを考えてしまうと、それが自分自身を悩ませた。

自分の好きな人が他の女の子と一緒に下校している姿を見てしまつたら、それは、もし自分がその立場になってしまつたら、ものすごく嫌なことだったかもしれない。

自分と水野はただのクラスメイト。だから一緒に帰れたのかもしれない。しかし、梨沙にしてみれば、それがクラスメイトだろうが何だろうが関係はない。

水野への恋心が刃となって自分の方へ向く。それはある意味当然のことだったのかもしれない。

自分の軽々しい行動が、杏と裕子までをも巻き込み、何より、水野をここまで巻き込んだ。

そのことが早希の心をキツく締め上げ、痛め付けていた。

しばらく水野君には必要以上に近付かないでいよう…。

それが彼のためでもあるから…。

もうこんな迷惑は掛けたくないから…。

早希はそう心に決めて、五時間目のチャイムを聞いた。

さよならしてもいいですか…？

「秋山は何やるの？」

「えっ？ 何のこと…？」

「何って、さっき自分で言ってたじゃん。球技大会の種目」

「あ、ああ…」

球技大会まであと約一ヶ月、そろそろ各競技のメンバーを決めなければならぬ。

下校前のホームルームの最後、プリントを見せて記名するように頼んだのは確かに私自身だった。

「私は、最後に書けばいいから、空いたところでいいかなって…」

「そっか。俺はサッカーなんだけどな…」

水野君はサッカー部だから、それは私もそうだろうとは思っていた。きつとうちのクラスのエースストライカーとして大活躍してくれるはず。ほら。本人が書かなくなつて、プリントを置いておいた黒板のほうから「水野はサッカーだからな！」なんて声も聞こえてくる。いいな。運動神経のいい人は…。

私は得意なスポーツがあるわけでもないし、裕子と一緒にいいかな…。

杏ちゃんは水野君のようにエースとしてバスケットに取られちゃうだろうし…。

そんな胸の内を読み取ったかのようなタイミングで裕子が私を呼んだ。

私は「ごめんね」と水野君に言い、裕子のもとへと駆け寄った。

「バレー？ サッカー？ バスケットは精鋭揃えるみたいだし、ないっし

よ？」

バレーかサッカーならば女子だけで出来る。それに、往々にしてこういうとき運動神経のよくない人達は大人数のところにまとめられてしまうものなのだ。

「って…もうサッカーしか空いてないわ…」

「うん。いいよ。それで」

他のクラスもきつと私達と同じ。運動神経のよくない子はサッカーにまわってくるはず。

だから私達がクラスの三冠に貢献できるとすれば、これが妥当なところなのかもしれない。

「おつ。サッカーにしたんだ？」

「サッカーが空いてたから…」

全員が書き終わったのを確認して、記入内容に不備がないかを確認していると、再び水野君に話しかけられた。

「これから練習するんだけど、女子もやろうよ」

「私は、これを出さないといけないから…」

「…そっか」

まだ何か言いたげな水野君に再び別れを告げる。

そう。必要以上に接しないほうが彼にとってもいいことだから…。

「水野！。行くぞー？ 女子もちゃんと来いよなー」

「おつ…！ 今行く」

背中に痛いほどの視線を感じながら、私は教室を出た。

職員室で先生にプリントを提出し、本来ならば校庭で練習をしているみんなのところへ行かなければならないのだけれど、私は階段を四階まで上り、パソコン室へと向かった。

ガラガラガラ

「やっぱり来た」

あれ…？

みんなと一緒にサッカーの練習をしているはずの林君がなぜかそこに居た。

「林君？ 練習は？」

「委員長こそ、練習は？」

「私は…部活…」

「水野が、たぶん部活行くと思うから連れて来いってさ。」

俺の他にパソコン部いないしね。頼まれたわけ」

さすがだ。

でも、運動部の三年生はもう引退したけれど、私達にはハッキリとした引退はない。

だから、私だって部活に出てもいいわけだ。

正直なところ、それは、あまり彼と一緒に居たくなかったただけなのだけれど…。

「行くよ？」

「いいよ…私は…」

「いいわけないだろ？」

「ほら…委員会のやつとかやらなきゃだし…」
「そんなの後でいいから」

それでも行くのを渋っていると、林君は私を窓際へと連れて行った。そして校庭の一角を指差し、楽しそうにパス回しをするみんなの姿を私に見せた。

「何が嫌なのかわかんないけど、楽しいよ？きつと」
「……うん」

私も何を意地を張っているんだろう。

これは練習だ。みんなで球技大会の練習をするだけなんだ。たまたま水野君と同じ競技に出ることになったただけなんだ。そう自分に言い聞かせて、私はみんなのパス回しの輪に加わった。

うん。みんなで遊んでいると思えば楽しい。

何人が鬼を輪の中に入れて、取られないようにパス回しをして、女子もいるから手加減をして足を開いていてくれるけれど、そこ目掛けて蹴ったらその後ろでもう一人待ち構えてて、まんまと取られてしまったり、やっぱりサッカー部の男子は巧くて、フェイントをしたり、ダイレクトパスで鬼を翻弄したり、ワイワイキヤーキヤー言いながらやっているうちに結構みんな本気になってしまって、気が付いたらもうヘトヘトで、息もすっかり上がってしまっていた。

「もう…やめよ…！」
「俺も、もうムリ…！」
「よし、じゃあ終わりにすっか」

終了の合図とともに、私達はその場に座り込む。
立ち続けているのは運動部の男子だけだ…。

「じゃあ、俺ボール片付けてくるよ」

「おう、サンキュー。水野」

「じゃあ、私達は帰ろっか」

「あっ…。私、教室に置きっぱなしだ…」

裕子に「ちよつと待ってて」と言い、私は急いで教室に戻った。

職員室にプリントを出しに行つて、その足でパソコン室に行つてしまつて、そこから教室に寄らずにここに来てしまったから、私の荷物は全部まだ机の上に置きっぱなしだったのだ。そんなことも忘れるくらいみんなで夢中になつていたんだと思うと、なんだかんだ言つて、うちのクラスも仲が良かったんだなあと安心した。

タツタツタツタツ

誰もいない廊下に響く自分の足音。

なんだか妙にうるさく響いて、ちよつと恥ずかしい…。でも、急がないと。裕子を待たせている。

ガラッ！

私は走つた勢いそのままに教室のドアを開けた。

「わっ！？ …秋山か、驚かすなよな」

「あっ、う、ごめん…」

教室にはなぜか水野君がいた。

いや、当然だ。私より前にボールを片付けに教室に来ていたのだから。

一瞬だけ気まずくなる。

私は足早に自分の席へ行き、カバンを背負つて手提げ袋を両手で抱

え、その場から去ろうとした。

「ちょっと……待てよ……」

「……」

なぜ……？

どうして呼び止めるの……？

確かにちよつと気まずい空気は流れたけれど……。

この流れは二つに一つじゃない……。

どっち……？

やめて……。

どっちもいや……。

「俺の気のせいならいいんだけど……」

「……うん？」

「梨沙のことがあつた後くらいから、俺のこと避けてない……？」

「そんなこと……ないよ」

「ホームルームの後も、目も合わせてくれなかったじゃん……？」

「急いでだから……」

さらに言葉を続けようとしたけれど、「裕子を待たせてるから」と、それを遮った。

しかし、それが逆に火に油を注ぐことになってしまったのか、水野君は逃げようとする私の腕を掴み、それを許さなかった。

「絶対おかしい。今も全然目を合わせてくれない。

梨沙のことを引きずってるなら、俺謝るから。

だから、何でもいいから、思ってることがあるなら言うて」

「手……離して……。逃げないから……」

そう言うと水野君は「ごめん…」とすぐに手を離してくれた。
手が離れると私は向き直り、あれ以来思っていたことをそのままぶつけた。

「一緒にいると、やきもち妬く子が多いんだよ…」。

梨沙ちゃんだってそう。私に嫉妬してた。

水野君は人気者だから、前みたいに軽々しく一緒に帰ったらあんなるの。

今だって、私の腕掴んで、たぶん梨沙ちゃんが見たら、また嫉妬するし

他の女子が見ても、もしかしたら嫉妬して、また何かされるかもしれない。

私、そんなことで水野君を困らせたくないから。

だから、必要以上に近付かないほうがいいんだよ…」

「何だよ…それ……」

「だから……。さよなら…」

私の考えていたことは伝わったと思う。

水野君も頭のいい人だから理解してくれたと思う。

また止められるかと少し構えながら、でも、ドアのところまで来ても水野君は私を止めなかったから、きっと伝わったんだと思い、私は教室を出た。

タッタッタッタッタッ！！

私のスピードとは比べ物にならないほど早いその足音は、一瞬にして私に追いつき、それから、まるで獲物を捕らえる鷲のような力強

さと鷹のような鋭さが私の肩を捉え、体が回転させられたと頭が理解するよりも一瞬だけ早く、私は再び水野君と向き合わされていた。

「ぜんっぜん、納得できない！」

何それ、俺が困るって何？

友達のために悩めるなら、幸せなんじゃないの？

俺達、友達でしょ？

俺はそう思ってたんだけど…。

っていうか、これからも友達でいたいんだけど…！」

なぜ…。

なぜ、あなたは…。

そんなにも優しい人なのですか…。

あなたがそう言ってくれるのなら…。

私はこれからも、あなたの友達でいてもいいですか…？

教えてもらってもいいですか…？

「ほいつ。こないだ言ってたCD」

杏ちゃんからCDの入った袋を受け取ると、私は早速中身を取り出して確かめた。

「杏ちゃん的には、どれがオススメ？」

「そうだなあ、2曲目と3曲目と…、7曲目も良いかも」

「あれ？それ俺も持ってる」

「水野も持ってるの？」

「うん、俺はデビュー曲のSTORMが好きかなあ」

私の席の横を通りかかった水野君が話に加わる。

どうやら水野君もこのグループを知っているようで、杏ちゃんのオススメとは違う、自分のオススメ曲を教えてくれた。

「秋山もこういう音楽聴くんだ？」

「うん。杏ちゃんに薦められたから聴いてみようかなって」

「だったら、セルと一緒にGGのやつも聴いてみるといいよ」

「GG？」

「GroovyGirlsっていう、StormCellの妹分みたいなバンド。」

まだメジャーデビューはしてないけど、特にボーカルが良いよ」

水野君って音楽にも詳しいんだ…。

それは新たな発見。友達にならなければ分からなかったことだった。

「セル・GGと来たら、マイパラは絶対だね」

「上原も詳しいなあ」

「ヒカリの路上ライブだって見に行つてたくらいよ、当然でしょ」

そんな水野君よりもさらに上に行く杏ちゃん。

こういう話で男の子も女の子も関係なく盛り上がれる。

友達になれて良かったなあと改めて感じる瞬間。

「受験終わつたら、みんなでライブとかどう？」

「いいね。俺賛成！」

「早希は？」

行きたい！

ライブなんて今まで縁はなかったけれど、でも、みんなと一緒に
けるなら行きたい！

「裕子は誘えば来るでしょ。まあ女子はそれでいいとして、男子は
？」

「誰か誘う？」

「何、あんたハーレムがいいわけ？」

「ば、ばか…！」

照れて赤くなる水野君が、不覚にもちょっと可愛く思ってしまった。

「わ、笑うなよ…」

「だって、なんか可愛くって」

「何だよ…可愛いつて…」

ますます赤くなる姿がますます可愛い。

頼れる人の、普段は見せない姿。これも新たな発見。

「りんたろうと大村は誘ったら来るかもしれないけど、それでいい？」

「りんたろうって誰…？」

「林 太郎。ほら、さっきの時間に森鷗外が出てきただろ？」

つまりそれはこういうことらしい。

森 鷗外の本名、森 林太郎。

林君の本名、林 太郎。

だから、りんたろう。

林君もきつと覚悟はしていたことだっただろう…。

「林が可哀相になつてくるわ…」

「あだ名だしさ、愛嬌だよ愛嬌」

「でも、ちよつと羨ましいかも…」

「早希…あんだ、変なあだ名がほしいわけ…？」

変なあだ名を付けられるのは困るけど、

でも、今まであだ名を付けてもらった経験がない私には、一度体験してみたいものだった。

「秋山つて、英語っぽいよね」

「えっ？」

「秋山 早希」

「うん」

「あきやまさき」

「はい…」

男の子にフルネームで呼ばれると、何だか緊張してしまう…。それに、水野君の言い方は妙に丁寧で、何だか恥ずかしい…。

「A k i Y a m a s a k i ?」

英語っぽい言い当てた杏ちゃんに水野君も「Y e s !」と英語で返した。

「次の授業英語だから、それっぽく言ってみたら？」なんて杏ちゃんが冗談を言っていると、丁度それに合わせるようにチャイムが鳴り、とりあえず、ライブの話はまた放課後にということで、杏ちゃんと水野君は席に戻り、私もイスに座り直して、先生の声に耳を傾けた。

「テスト返すぞー」

その一声で、クラス全体が少しざわつく。

「平均点未満は補習だからなー」

「ええー…」

何の合図もないのに、全員の声が揃う。

しかし、問答無用で先生はテストを返していく。

「秋山」

「はい」

幼稚園から中3の今まで、出席番号が1番以外だった経験はない。だから私も返事をするより先に、準備は出来ていた。

正直言つて、英語は苦手だ…。

文法なんて何が何だか分からない…。

単語の意味も、教科書の例文に出てくるくらいしか分からない。受験を間近に控えてもなお、それは変わっていない…。

ハア…。

裏返しに渡されたテストを、裏返しのまま半分に折り、中が完全に
見えないようにする。

席に戻ると、裕子が「どうだった？」と聞いてきたけれど、私は「
見たくない…」と答えて、そのままテストを教科書の下にしまい込
んだ。

「受け取ってない人はいないな？」

「じゃあ平均点言うぞー」

教室が一瞬静まり返り、全員が息を飲む。

「今回の平均点は…58点」

発表の瞬間、歓喜と絶望が狭い教室内に入り乱れる。

むりむりむりむりむりっ！

先生も知っているでしょう！？

私の英語の最高点を…！

もう見なくても結果は分かる。でも、それでも一縷の望みを掛けて、
私はテストを開いた。

「せんせー。58点は？セーフ？」

「セーフ」

「つしやあー！」

そんな風に堂々とガッツポーズを出来るのが羨ましい。

「セーフだけど、お前はアウトだな」

「何でっ！」

浮かれて墓穴を掘る姿が微笑ましい。

「平均以上でも、出たいやつは出ていいからな」

さて、私はどうしようかな…。

杏ちゃんはある見えて英語は得意だから大丈夫そうだし

裕子はどうかな…。私と同じでギリギリかな…？

あと、補習になりそうなのは…。

授業が終わって、みんなと見せ合いつこしてからでいいか。

「やあやあ、お二人さん。テストはどうだったかな」

授業が終わると、早速、涼しい顔で杏ちゃんがやって来た。

「セーフ！」

裕子は親指を立て、堂々とテストを開いて見せる。

「65点かー。早希は？」

「うん…」

私はゆっくりとテストを開き、二人に見せる。

「うわー…」

「あつぶな…」

「い、一応、セーフでしょ！」

テストに書かれた58という数字。

それが意味するのは、ギリギリ補習を免れたということだった。

「でも、補習出たほうがいいのかなあ…」
「私だったら出ないわ」

裕子が即答する。

そうだなあ…。せっかくギリギリ免れたんだから出たくないなあ…。でも、出ておいた方がいいよなあ…。

「俺出るけど、一緒に出る？」

「はあ！？ マジ？ 水野が赤点…？」

「ちげーよ。でもあんまり出来良くなかったから、出ようかと思つて」

「何点だったの？」

「88点」

「あんた……。嫌味だわ…それ」

「それは、出ないほうがいいと思う…」

裕子も杏ちゃんも頭を抱えた。

素直なのはいいのだけれど、時々それが危なっかしい。本人がそれに気付いていないからなおさら…。

「反対されるならやめるけど…」

「うん…そうした方がいいわ」

「じゃあ、さ。代わりに早希に教えてあげてよ」

「ええっ！？ ちょっと、裕子…」

「ああ、いいよ」

いくらなんでもそれは…。

つていうか、水野君も快く返事してるし…！

「良かったじゃん。いい先生が見つかって」

「いや、悪いよ……。こんなことに付き合わせちゃ……」

「いいよ、俺は。どうせ暇してるしさ」

「ほら、本人がいいって言うてるんだからさ」

「うん……。じゃあ、よろしくお願いします……」

「うん！　よろしく」

どうしよう。

なんだか妙にドキドキして、水野君の目も見られない。

こんな時は、どうすればいいのか、教えてもらってもいいですか……？

女の子でもいいですか…？

「早希ー、部活行こー」

「あ、私は…英語教えてもらっから…」

「おっと、そうでした。…ふふっ」

もう…。

絶対に確信犯だ…。

そんな風に言うから、私も余計に意識してしまう。

ただテストの間違えたところを教えてもらっただけなのに…。

「じゃ、私は部活行くわ。頑張ってね」

裕子を見送り、英語の教科書とテストを広げる。

そして、辺りを見回して水野君の姿を探す。

しかし、いくら探してもその姿を見つけれない…。

教室にはもう十人も残っていないから、いれば絶対に分かるはずなのに…。

トイレにでも行ったのかなと考えつつ、でも、ホームルームが終わったらすぐ行くからと言っていたから、ちよっと待っていれば来るだろうと思いつつ、私は一人で先にテスト直しを始めていた。

一人、二人…。教室から人が減っていく。

水野君はまだ戻ってこない。

もう一人、さらに一人。教室に残っているのは、私と何人かの男子グループだけ。

そして、そのグループが教室を去ると、ついに私は一人きりになってしまった。

それでもまだ水野君は来ない。

どうしたんだらうと心配になり、顔を出して廊下をのぞいてみる。しかし、どここのクラスも同じ状況なのだろう。

廊下に人気は無く、教室から漏れる話し声の一つも響いていなかった。

そんな状況を理解して、私はようやく孤独感や寂しさをおぼえ始めた。

もしかしたら、忘れて帰ってしまったのかもしれない…。

急に訪れたそんな思いに人恋しくなった私は、荷物をまとめ、教室を出た。

ちよつとだけ、部室に行こう。

ちよつとだけ、裕子と話そう。

ただそれだけの目的を持って。

廊下の突き当たりの階段へ行くため、まるでカウントダウンのように教室を通り過ぎていく。

三年四組、三年三組、三年二組…。

三年一組の教室の前に差し掛かった時、微かではあるものの、人の声が聞こえた。

誰かいるのかな…？と反射的に教室を覗いた私は、衝撃的な光景を目にしてみる。

女の子と女の子が窓際で肩を抱き合って、キスをしていた…。

一瞬、頭が混乱し、思考が止まり、足も止まる。

長い時間、二人は唇を重ね合わせたまま、確かめ合うように動いた。

私はそれを、息を飲んで凝視してしまっていた。

唇が離れ、糸を引いた唾が夕日にキラリと光る。

離れたことで、一人ずつの顔もハッキリと見える。

そして、私を第二の衝撃が襲う。

キスをしていた二人は、学年の中でも男子からの人気を二分する二人。

一組の瀬尾今日子と香川優衣だった。

いわゆる萌え系で俺達の妹なんてキャッチコピーまで付けられている瀬尾さんと、それとは対照的にいわゆる美人系のアイドルとしての人気を誇る香川さん。
なぜこの二人がこんな…。

人目を忍ぶわけでもなく、放課後の教室で堂々と。

しかも、窓際でしていたら、外からも見えているかもしれない。

ようやく目を逸らすことが出来た私は、早くなってしまったこの鼓動を何とか静めようと、部室に行くのを諦め、教室へと引き返した。

とんでもないものを見てしまった…。

これではもう英語の勉強どころではない。

自分の席に座り、大きく深呼吸をする。

そう言えば水野君はどうしたのだろうか、そちらに意識を戻して、さっきのことを忘れようとする。

コンコン

不意にノックをされて、我に返る。

ドアの小窓を見てみるけれど、誰も居ない。

コンコン

しかし、もう一度ノックをする音がした。

誰だろう…？

私は恐る恐るドアの前に立ち、ゆっくりとドアを開けた。

「ふふ。つかまえた」

一瞬、目の前が真っ白になる。

見つけた。捕まった。まさにそんな心境。

両側から両手を掴まれて、自由を奪われた。
それが誰と誰か、確認するまでも無く分かる。

「さつき…見たよね？」

「私達がキスしてるとこ…」

「み、見てない…です…」

「ウソ。じゃあ何でこんなにドキドキしてるの…？」

香川さんは私の心臓に手を当てるといふよりは、少し乱暴に私の胸を掴んだ。

「ウソはイケナイんだよ…？」

今度は右の胸を瀬尾さんが掴む。

「あの…やめて………」

「ふふ。許してほしい？」

「じゃあ………」

二人の顔が私の耳に近づく。
そして、同時に

「キスしようか」

と囁いた。

女の子同士でキス…。
いけない…。そんなことは…。
拒みたいけれど、体はもう動かない。

「怖がらなくていいのよ…」

「優しくするから…」

「……やだ…やめて…」

「ダメ」と瀬尾さんが耳元で強めに言う。

「もしかして、ファーストキス？」と今度は反対側で香川さんが言う。

私は頷いた。すると香川さんは「じゃあ教えてあげる」と言い、私の下あごを少し上に上げた。

あっ…ダメだ…もう…。

女の子とキスしちゃうんだ…。

しかも、ファーストキス…。

覚悟を決めたわけではないけれど、目が自然と閉じた。

「あっ…居たっ！ 秋山！」

「チッ…」

はっ…？

救われた…？

香川さんは舌打ちをして、私から離れた。

そして、瀬尾さんに「帰ろ」と言い、瀬尾さんもそれに頷いて、二人は去っていった。

何だったんだろう…。

でも、助かったみたい…。

駆け寄ってくる水野君が見える。

そうだ、英語のテスト直し。

「帰っちゃったかと思った…。良かった…」

「あ、ごめんね…」

「うっん、俺こそゴメン。顧問の先生に急に呼ばれてさ」
「あ、教室、入ろう…？」
「うん」

夕日が教室を一面橙色に染め上げている。

そう言えば、前にもこんな風に二人で教室に居たことがあったわけ…。
いやいや、それよりも目の前の英語に向き合わなきゃ。
せつかく水野君も教えてくれてるんだ。
と、その顔を覗き込むと、私と同じように水野君も窓の外を眺めていた。

「夕日…綺麗だね」

これをたそがれると言うのだろうか。

水野君はこちらを向かず、外を見つめたまま言った。

「さっき…何してたの…？」

「えっ…？」

「その…してないよね…？」

してないというのは、キスのことだろう。

今まで言わなかったけれど、やっぱり見られていたんだ…。

「…してないよ」

「そっか…」

しかし、それっきり会話が途絶えてしまった。

なんとなく気まずくなり、何度か話を続けようとしたけれど、咄嗟に思い付く話題がなかった。

テストに視線を落としたり、窓の外にまた戻してみたり、時々水野君の様子を伺ってみたりしながら、私は意を決して言葉を発した。

「…あの」

「あのさ」

被った…。

漫画のワンシーンのように、見事に…。

「ごめん。いいよ…」

「うん…あの…」

譲ってもらい、私は言葉を続けた。

「私は、女の子は好きじゃないから…。

好きだけど、そういう感情は無いから…。

ちゃんと、男の子が好きだから…」

それだけは誤解されないように伝えておきたかった。

すると、水野君は一瞬だけ考えるような顔をしてから、スッと立ち上がり、「うん」と言って微笑んでくれた。

良かった。誤解されなくて。

「遅くなっちゃうし、帰ろっか」

「うん」

私も立ち上がり、荷物をまとめて二人で教室を出る。

廊下を進み、階段を降り、昇降口で上履きから靴に履き替え、校門を出る。

と、一歩二歩、大きく歩いた水野君が振り返り、立ち止まった。

「あのさ、俺も女の子が好きだから…！」

水野君はそう言うと、間髪居れずに「じゃあまた明日！」と言って走って行ってしまった。

残された私はしばらくその場で立ち尽くしながら、吹き抜ける風が運んでくる微かな夏の匂いを感じていた。

ゴールを決めてもいいですか…？

「基本的なルールは公式ルールと同じ。

あからさまなオフサイドはファール。

フェアプレー第一で、特に男子は女子には手加減すること。

男子の得点は1ゴール1点、女子は1ゴール2点。

前後半20分ハーフ、ハーフタイムは5分。

選手の入れ替えは何人でもOK、ただし一度交代した選手が戻るの
は無し。

…そんなところかな」

先生から渡された球技大会のサッカーのルール。

でも、元々のルールもあまり知らない私では、みんなに説明するこ
とが出来なかった。

だからと言うか、こんなときだけ頼ってしまうのは都合がいいのだ
けれど、サッカーのメンバーを集めたところで水野君にバトンタッ
チし、後の説明は全部任せてしまったのだった。

「あからさまなオフサイドって待ち伏せとか？」

「たぶん、そうだと思う」

「じゃあ、ラインの駆け引きは多少判定もアバウトってことか」

「りんたろう、1トップで前線のチェイスは任せるよ？」

「俺かよ」

水野君からの指名に少し不満そうに林君が答える。

「本職はサイドハーフなんだけど」とか「俺今はサッカー部じゃな
いし」とか、色々文句を言いつつも、「足の速い経験者にしか出来
ない役割なんだよ」と水野君に言われると、「わかった」と納得し
た様子で引き受けていた。

「問題は…女子をどこに置くかな」

「うーん」と唸りながらも水野君はすぐに答えを導き出し、「全員中盤に置こう」と言った。

「GKは山口、DFは中野・畑中・長澤・駒田でとにかく守備を固めて、

中盤に女子と俺と川本、1トップで林。これでどう？」

「俺とお前だけで中盤回るか？」

「女子には俺が指示だすよ。」

それに、相手もそこまでパスワークが良いわけじゃないし、女子がとにかくボールを追いかけて、相手のミスを誘う。こぼれたボールを俺と川本で拾って、一旦落ち着かせて、サイドの長澤と駒田が空いてればそこから崩すし、りんたろうがフリーならポストプレーかDFの裏で受ける。そんな感じでどうかな？」

「ハマればいけそうだけど、女子の体力が持つか？」

「プレスタイミングも俺が指示するよ。」

むやみに男子のボールは取りに行かせないよ」

やれ、これは大人数競技とは言え、どうやら本格的に勝ちに行くようだ…。

三冠を狙うためには当然勝たなければいけないのだけど、男子の熱の入れように女子は完全に置いていかれてしまっていた。

まあ、何だか色々考えているみたいだし、きつと作戦通りにいけば勝てるんだろう。

「あ、女子。聞いて。」

もし誰かのシュートがキーパーに弾かれたりした時は、

近くにいる人は絶対そのボールを追いかけて。

追いかけて、もしシュートが出来そうだったら、絶対シュートして。いい？」

私達は揃って頷いた。

やっぱりサッカーは点を取ってこそ。

私も一点くらいは取ればいいな…。

そんな淡い希望を抱きながら、いよいよ当日を迎え、私達は試合開始のホイッスルを聞いた。

「川本！こつち！！」

「サイド散らせ！」

「女子！取りに行つて！！」

「ナイスキーパー！」

「りんたろーっ！！！！」

次々と指示が飛び交う。

最初は水野君の声だけだったものが、つられるように他の男子からも声が出ている。

やっぱりすごいな。水野君はボールにはあまり触っていないけれど、それでも完全に試合をコントロールしている。ここまで三試合の結果もその賜物であることは言うまでもない。

一試合目3 - 0、二試合目4 - 1、三試合目2 - 0。

そして、全勝同士で迎えた三年一組との四試合目。

サッカー部六人を擁する一組はさすがに手強い。

でも私達も水野君を中心に、チームワークで立ち向かい、ここまで0 - 0、お互いに拮抗した展開のままハーフタイムを迎えていた。

「引き分けじゃ得失点差で負ける。攻めにいこう」

「水野、中盤一枚でいけるか？」

「やってみる」

川本君がFWになって林君と二人で点を取りに行く。

その作戦が吉と出るか凶と出るか。

その答えは、後半の開始とともに私達の前に大きく立ちはだかった…。

後半のキックオフとともに、相手はサッカー部全員での速攻を仕掛けてきた。

川本君のポジションが変わり、中盤が薄くなったと見るや、ボールを後ろに下げることなく、いきなりのドリブル中央突破。不意を衝かれた川本君と林君が慌てて追いかけるも、追いつくはずが無く、何とか止めようとボールを取りに行った水野君までもが見事なパスワークに翻弄され、女子の作る壁など、存在しないかのごとくあっさりと抜かれ、残るはディフェンスの二人とキーパーだけ。

しかし、サッカー部が四人も同時にそのディフェンスラインに襲い掛かれればそんなものは無いに等しく、最後はキーパーまでもがフェイントでかわされ、シュートも打たぬままに、パスとドリブルだけでゴールを奪われてしまったのだった。

そして、失点のショックから不用意に与えてしまったフリーキック。壁の上を越えたボールに強烈な回転が掛かり、綺麗な弧を描いてキーパーの指先をかすめてゴールネットに吸い込まれる。0 - 2。後半ももう半分を過ぎていた…。

「俺が取り返す…」

ボールを脇に抱え、うな垂れる女子の横を通り過ぎながら水野君が言った。

そして、そのままセンターマークにボールを置き、川本君に後ろに下がるように指示を出し、ホイッスルの音とともに、林君からボールを受けると、そのまま一人で敵陣をドリブルで切り裂いた。

「フォローしろ!!」

それを見た川本君が咄嗟に指示を出す。

林君・駒田君・長澤君が水野君を追い、指示を出した川本君も敵陣へと入っていく。

しかし敵も甘くは無い。すぐに水野君を取り囲み、激しくボールを奪い合う。

水野君はフォローに来た林君に一旦ボールを預け、そのマークを振り切り、林君はさらにフォローに来た長澤君にパスを出し、自分は最前線へと上がっていく。

長澤君は逆サイドでフリーになっていた駒田君にボールを送り、駒田君はそのままドリブルでサイドライン際を駆け上がり、ペナルティエリアに侵入したところで、ニアサイドに入り込んできた川本君にセンタリングを上げた。

「水野!!」

ディフェンスを引き付けニアサイドでボールを受けた川本君は、そのパスをスルーして後ろへ流し、ボールはペナルティマークのやや後方でフリーで待ち構えていた水野君の目の前に転がった。

大きく一歩踏み込み、インパクトの瞬間軸足を浮かせ、シュートを放つ左足に全体重を掛ける。

水野君の放ったシュートは地面を這う低い弾道で、キーパーを一步も動かせぬままゴールネットを射抜いた。

1 - 2。その瞬間、私達に再び希望の光が見え始めた。

あと一点。あと一点で追い付ける。

あと一点。女子が決めれば逆転。

しかし、相手もそれは分かっている。

だから、一点を返してからは自陣でボールを回し、残り時間を浪費しようとしていた。

最前線では林君が必死にボールを追いかけている。

でも、奪えない…。

川本君や私達もプレッシャーを掛けてボールを奪おうとする。

でも、奪えない…。

私達がそうして前に出始めると、空いた後ろのスペースへのキラーパスを放り込む。

「行け！！」

相手の出したパスが少し大きくなり、中野君の守備範囲に転がり込む。それを見るや、キーパーの山口君が指示を出し、中野君がボールに突進する。そして、相手と激しく当たりながらも奪い取ったボールをすぐさま畑中君に渡し、畑中君が最前線の林君に向けて、思い切りボールを蹴り上げた。

ボールは一直線に林君の胸へ収まる。胸トラップでディフェンスをかわし、キーパーと一対一で向かい合う。

しかし、シュートの瞬間、振り切ったディフェンスが後ろからスライディングを仕掛け、林君は倒されてしまった。

「あーっ……」

試合をしながら、すっかり観客になってしまっていた私達は一様に落胆の声を上げた。

ピーッ！

「あーっ！？」

しかし、その声は一瞬の笛の音で上向いた。

後ろからのスライディング。ボールではなく足を狙った危険行為。レッドカード。

審判をしていた人がそんな本物のカードを持っていたことに驚き、実際にあの真つ赤なカードを目の当たりにしたことに驚き、何よりそのカードが突き付ける相手の退場とペナルティーキックという現実に驚いた。

私達は全員、敵も味方もペナルティエリアのライン際に立った。

エリア内にはゴールキーパー。

そして、ボールに額を乗せて祈る水野君。

ペナルティーマークにボールを置いて、距離を取る。

一度後ろを振り返り、私達の姿を確認して、助走に入る。

入れ…入れ…！入れ…！！

一歩、二歩。ゆっくりとした助走から、水野君はゴールの左下隅を狙ってシュートを打った。

キーパーが必死に飛び付くもボールは伸ばした指のひとつ先。誰もがゴールに吸い込まれると思ったその瞬間…。

カンッ！

と、甲高い音とともに、ボールはポストに弾かれて無人のゴールの正面に跳ね返ってきた。

水野君が真っ先にボールに駆け寄る。

ゴールには誰もいない。

これを決めれば2 - 2の同点…！

誰もがそう思い、そして、水野君の蹴ったボールの行方に誰もが啞然とした…。

「何で、あんなことしたの…？」

「えっ？　だって、同点じゃ優勝できないでしょ？」

「そうだけど…」

それが成功したから良かったものの、失敗したら一体何と言われていたことか…。

それこそ私も道連れになって、責任を感じるようになっていたかもしれないと言うのに、当の水野君はと言えば、自動販売機の前で涼しい顔をしてスポーツドリンクを飲んでいる。

「秋山なら、絶対あそこにいるって分かってたから」

「そんなの偶然…」

「偶然じゃないよ。俺はちゃんと見てた。」

俺が女子にお願いした時、ちゃんと目を見て頷いてくれたのは秋山だけだった」

「それも偶然だって…」

「ちゃんと誰がどこにいるかも蹴る前に見て、

ちゃんとポストで跳ね返るように蹴って、
ちゃんとそれを秋山のところへパスしたんだけどな…」

確かに私は目を見て頷いていたし、実際に跳ね返ったボールに向かって走った。

でも二十人もいる中で私だけを狙ってパスを出す。

ましてや、ヒールキックでこっちを向かずに足元へ蹴りやすい正確なパスを出す。

そんなプロでも難しい芸当を狙ってやるなんて考えられない…。

やっぱりそれは偶然私のところへボールが来て、それを蹴ったら偶然ゴールの中に入ったということなのだ。

「じゃあ、さ」

スポーツドリンクを飲み干した水野君が、空き缶をゴミ箱に投げ入れながら言った。

「偶然じゃなくて、奇跡って言うって。」

俺達が起こした奇跡。

その方がカッコイイっしょ！」

ゴミ箱の縁に弾かれた空き缶は、甲高い音とともに私の足元へと転がってきた。

なぐさめてあげてもいいですか…？

「うー……」

「どうしたの？」

「もうダメかも……」

「杏が弱気っ！？」

「だって…さ…」

人もまばらになった放課後の教室。修学旅行のしおりを作る早希を手伝おうと裕子と杏も教室に残り早希を囲んでいた。

しかし、作業を始めてまもなく杏の手が止まり、そのまま机に突っ伏すと、杏にしては珍しく弱音を吐いたのだった。そして、早希と裕子があつたのかと尋ねると、杏は虚ろな表情のまま、早希と裕子に事の一部始終を話し始めた。

「昨日さ、ほら、私と林と大村って近所だし、昔から仲良くてさ、特に私と大村は今もよく二人でバスケットかするわけ。

で、昨日も二人でバスケットして…そしたら丁度、林が通ってさ…なんか、いつもなら普通に話しかけてくるのに、

昨日は何も言わなくて、そのまま行っちゃおうとして、

私が気付いて声掛けたら、なんか目も合わせてくれなかったし、何でもないって言って、すぐ話し切り上げて行っちゃおうとして、なんか、気まずいって言うか…変な空気になっちゃってさ…。

今朝会っても、おはようも言ってくれなかったし…。

なんか、急に自信無くなってきた…」

「気にすることないって。」

ちよっと機嫌悪かったとかじゃないの？」

「そうかもしれないけど…。
そうならそれで気になるじゃん…。
私、あいつに何かしたのかな…」

机の傷を指で何度もなぞりながら杏は深く溜め息をついた。

早希も裕子も、何か励ましの言葉を探したものの、実際には何も言葉になつては来ず、三人はただただ無言のまま、しばらく作業を続けていた。

「あれ？ …ああ、丁度良かった。
ねえ、りんたろう来なかった？」
「知らないよ」

林を探して教室へ戻ってきた水野のなんとタイミングの合ってしまったことだろうか…。

杏は水野のほうも向かず、不躰な態度でそう返した。

早希はそんな杏の態度に一瞬動きの止まってしまった水野をすかさずフオローし、廊下へと連れ出した。

「もう…水野君タイミング良すぎ…」
「良かったの…？ むしろすつごく悪かったような気がするんだけど…」
「うん、ごめんね。ちょっと杏ちゃんの相談に乗ってたところだったから…」
「うん、なんか俺こそごめん…」
「ごめん…水野」

早希と水野の背中を、そう言い残して杏は通り過ぎた。
二人とも声を掛けることも後を追うことも出来ず、どちらからともなく互いに背を向け、早希は教室へ、水野は林を探しに、それぞれ

戻っていった。

階段で鉢合わせる杏と林。

いつもなら、どちらからともなく声を掛け合うはずが、林の「おう」という言葉に対して、杏は右手を軽く挙げただけで、一方的に林とすれ違った。

「どした？」

林もこれには違和感を感じたのだろう。

階段を下りていく杏をすぐに呼び止め、そう尋ねた。

「別に…」

「別につて…」

「ごめん、何でもないよ」

「何でもないないだろ」

苛立ちを隠そうとしない真っ直ぐな目。

その視線に捕らえられた林はそのまま棒立ちになってしまった。

「その言葉、そのまま返すよ。」

「あんたも私に同じこと言っただから…」

「えっ…」

「そう言えば、水野が探してたよ、早く行ってあげな」

「あ…ああ…」

視線を逸らし林を解放すると、杏は階下に消えていった…。

ガラガラッ

「教室に居たんだ」

「ああ、林、丁度良いわ。話があるの」
「俺も」

杏と別れた後、林は早希と裕子を探していた。
そして、教室で二人の姿を見つけると、先ほどまで杏が座っていた椅子に座り、裕子よりも先に話を切り出した。

「杏の奴、何かあったの？」

「ハア…。やっぱり自覚無し？」

「何？ 自覚って」

「あんたが杏に素っ気無い態度取るからでしょ？」

「俺のせいなの？」

「昨日、杏と大村に会ったでしょ」

「ああ…会ったけど…」

「その時のことで、心当たりは無いの？」

「心当たりって言うか…」

煮え切らない林の態度に、今度は裕子までもが苛立ちを感じ始め、その様子を黙ってみていた早希は、裕子の怒りの爆発を心配していた。

「まさかとは思うけど、気付いてないとは言わせないよ？」

「何のことだよ」

「杏の気持ちに決まってるでしょ」

「じゃあ…」と言って林は立ち上がった。

「じゃあ…お前らにはどう見える…？」

「何が…」

「杏と大村、やっぱりお似合いだとは思わない？」

球技大会の後くらいから噂も立ってるし、

気も合っみたいだし、俺よりずっと良いだろ…」

「そんな噂なんか関係ないでしょ!？」

ついに林は裕子の逆鱗に触れてしまった。

「あんたがそんなだから杏が悩むんじゃない！」

つか、噂とかどうでもいいし、自分の気持ちはどうなんだよ!」

その声は教室を抜け、廊下にまで響き渡った。

早希は必死で裕子をなだめたが、裕子は止まらなかった。

裕子に触発されて林までもが感情的になりつつある。

両者の間に割って入ろうとする早希だったが、早希の力ではもうどうにも收拾がつかなくなってしまっていた。

「杏の気持ちを知ってて、何でそんなことが言えるわけ？」

何で好きとか嫌いとかはつきり言えないわけ？」

「俺は…」

「もういいよ、裕子…」

「あっ…・杏…」

三人が同時に振り返ると、教室のドアに力無さげに寄りかかる杏の姿があった。

いつからそこにいたのか。三人とも全く気が付いていなかった。

「ごめん…つい…」

「私、別にそんなのが聞きたいわけじゃないから…」

ゆつくりと三人のもとへ歩いてきた杏は、一瞬だけ林の横に並び、しかしそちらには全く目もくれずに、早希と裕子に「帰ろ」と言った。

「いいの…？」

「なんとなく分かったから…」

早希と裕子もそれ以上は何も言わず、林に目をくれることも無く、教室を出て行った。

三人が去った後の教室。

残された林は、一歩も動くことも無く椅子に座ったまま天を仰いで途方に暮れていた。

「りんたろう」

「ん…？ 水野か…」

「帰りにラーメンでも食ってかない？」

「……行くわ」

水野に促され、林はゆつくりと席を立った。

手を繋いでもいいですか…？

「よっしゃー！ イイ男捕まえるぞーっ！..」

「いや、修学旅行だし..」

「杏ちゃん..」

あれ以来、林君とは少し距離を置いているようにも見えるけど、でも、杏ちゃんに元気が戻ったみたいだから、それは良かった。

「ナンパじゃなくて観光…って聞いてないし..」

「あはは..」

当然、憂さ晴らしも兼ねて、こんなに大げさにはしゃいでいるんだろうけど、帰るまでこのペースがずっと続くのかと思うと、それも恐ろしくて、でも、いつまた気分が落ちて反動が来るのかと考えると、それもまた恐ろしい。

「金閣寺より金髪の外人かよ..」なんて冗談交じりに裕子が言ったけど、本当は、私も裕子も杏ちゃんのことを心配でなかった。

「まあ子供じゃないし..ほっとくか..」

「うん..。離れなければ、いいよね..」

カシャッ

杏ちゃんを見失わないようにしつつも、私はシャッターを切った。中学生として最初で最後の修学旅行。やっぱり、ちゃんと思い出を残したいから。

「あれ？二人だけ？」

「なんだ、あんた達も来てたの？」

「まあ自由行動とは言っても、セオリーってやつじゃん…？」

撮った写真が気に入らなくて、もう一度金閣寺に向けてデジカメを構えていると、後ろのほうで水野君と裕子の話し声がしていた。

「あ、早希、せっかくだから自分写しなよ。撮ってあげるから」
「えっ？ うん、じゃあお願い」

私からデジカメを受け取り、男子達のところまで戻った裕子が、不意に水野君の背中を押した。

「ほれ、水野も入れ」

「えっ、ちょっ…俺も!？」

「あんたらはダメ」

水野君につられて近付こうとした男子を裕子が腕を伸ばして遮る。
えっ？っていうか、何でツーショット!？

「ほら、早くしてくれない？」

頭に手を当てながら、水野君はゆっくりと私の隣に立った。

「い、いいよ？ 私一人で…」

「俺じゃダメ…？ ダメなら言って？」

「ダメじゃない…けど…」

けど…。

「もっと寄ってくれないと、上手く入らないよ」

「ダメじゃないなら…いい？」

「……うん」

「いくよー！ ハイチーズ！」

カシヤツ

かけがえのない思い出が、またひとつ私の中に生まれた。

そして、さっきまで片手で持っていたカメラを、気付けば両手で大事に包んでいる自分がいた。

「あっ！ ヤバイ…」

「どうしたの？」

「杏、どこ行っただ！？」

「あっ…」

自分のことにすっかり夢中になって、杏ちゃんのことを忘れてしまっていた。

慌てて辺りを見回してみたけれど、その姿は見当たらなかった…。

「ああ、たぶん平気だよ。りんたろうが追いかけたみたい」

「なんか…逆に不安だわ…」

「何があつたかは知らないけど、

二人のことは二人で解決させたほうがいいんじゃないかな」

「水野お…。まああなたは強いからそれでいいけどさ…」

「別に、強くなーけど…」

ただ、今は周りがとやかく言わないほうがいいかなって…」

「私が杏ちゃんだったら、たぶんなんだかんだ言っても、

林君が探しに来てくれたら、ちよつとは嬉しいかもしれない」

「早希が言うのなら、まあいいけど…」

裕子は渋々ながらも納得した様子で、気を取り直すようにお土産を物色し始めた。
そしてそんな裕子に続くように、私も家族へのお土産を選ぼうと、売店に入った。

「そろそろ戻らないと、集合時間だぞ」
「何しに来たの」

杏は池のほとりにしゃがみこみ、風に揺れる水面をただぼーっと眺めていた。

「一人でどっか行っちゃうから。心配するだろ」
「別に、あんたが来なくなたって、早希と裕子が来てくれたのに」
「あのなあ…」

杏は言葉こそ交わしていたものの、視線は依然として水面を見つめたまま。

林のほうは一切見向きもしなかった。

「それとも、何か責任でも感じてるわけ…？」
「責任って言うか…俺のせいだろ…？」
「何それ。ほんとに分かってんの？」

答えの返せない林に見切りを付けるように杏は立ち上がった。

「もういいよ。」

振った相手の顔色伺うとか、もう、何なんだよ…。
ちゃんとみんなのそこには戻るから。もう行くよ」

「待てよ」

林は自分の横を通り過ぎようとする杏の腕を掴んだ。

「誰かお前のこと嫌いだって言っただよ」

「は…？ 同じことじゃん」

「違う」

「何が違うの」

「俺は杏が好きだ」

「え…何…？ こんなところで…。バカじゃないの…」

杏は照れ隠しをするように、辺りの様子を伺った。
しかし、幸いなことに辺りに人の気配はなく、ここにいるのは自分達だけだった。

「でも、俺よりもっと良い奴がいるから…」

たぶんそのほうが杏にとってもいいと思うから。

だから俺は…」

「ほんと、バカね…」

あんたがバスケ出来ないから、仕方なくあいつとやってんじゃん…。

そりゃあいつとやれば、私の練習にもなるのもあるけどさ、
でも、本気じゃなくて、一緒にやりたいじゃん。

別にバスケじゃなくても、サッカーだっていいよ…」

「えっ…」

「いいんだよ…。ってか、何でそんなに自信無いんだよ。
私にとっては充分魅力あるんだよ…」

掴まれていた腕を振り解き、杏は背を向けた。

「何でそこまで言わせるかな…。」

ほんとバカ…。」

「うん。バカだ俺…。」

ごめん。もういいよ。行こう」

林は杏の手を握り、前に行くように少し早足で歩いた。

そして杏もすぐにそのスピードに追い付くと、二人は並んで歩き始めた。

「もう一つだけ言わせてもらえろ？」

「何？」

「もうちょつと背筋伸ばしてくれないかな…」

「俺、猫背…」

「それは知ってる。そうじゃなくてさ、分かんないかな…」

ショーウィンドウに映る並んだ二人の姿は、ほんの少しだけ杏のほうが背が高かった。

「ほら…」

「ああ…」

林が背筋を伸ばすと、二人の身長は丁度同じくらいになり、それを見た杏の顔にはようやく笑顔が戻った。

「これでいい？」

「まあ、８０点かな。」

バスケやったら少しは身長伸びるかもよ!」

「夏休みはバスケット三昧だな…」

「何？嫌なの？」

「別に…」

溜息と同時にまた少し猫背に戻った林の背中を杏が小突いた。

「集合場所に行くまでは、それキープね」

「はいはい…」

手を繋いだまま集合場所に現れた二人を、クラス総出で冷やかしたことは言うまでもなかった。

が、当の二人はまるで開き直ったかのように、それでもなお、手を離そうとはしなかった。

お姫様でもいいですか…？

「いいなーいいなーいいなーいいなーっ！」

「裕子……」

夕食前の自由時間、私と裕子はロビーでジュースを飲みながら話をしていた。

話題はもちろん、杏ちゃんと林君のこと。

彼氏のいない裕子は杏ちゃんのことを相当羨ましく、何を言うにも「いいなー！」から始まっていた。

「裕子は好きな人とかいないの？」

「いるけどさあ……」

「だったら、そのうち…ね？」

「私のは違うの。好きって言うか…好きだけど、憧れかな…」

椅子に腰掛け、足をぶらぶらさせながら、きっとその憧れの相手のことを思い浮かべているのだろう。

裕子の口数は急に少なくなった。

「その人、うちの学校の人？」

「だったけど、今は違う。先輩だから」

「メールとかしてるの？」

「ほとんど私から。一方通行かな…」

「そっか…」

裕子が黙ってしまうから、とりあえず聞いてはみたけれど、それは逆に聞かないほうがいいことだったかもしれない。

「いいのよ、私は。」

杏には林が居て、早希には水野が居て。二人のこと応援してるから」

「杏ちゃんはそうだけど、私は違うよ?」

「なーに言ってるの。今さらしらばっくれたってダメ」

「えっ、ほんとにそういうのじゃないって...」

「そうだ。ちよつといいこと考えたから、部屋戻る?」

「うん...」

裕子は何か勘違いをしている。

私と水野君は付き合ってたなんていないし、確かに水野君には少し憧れるところはあるけれど、それは好きとは違う感情だと思う。それに、水野君が私のことを好きになることなんて...。

「ほれ!」

部屋に戻るなり、裕子はバッグの中から携帯を取り出し、いじり始めた。

そして、誰かに電話を掛けたのか。携帯を私に向かって投げ渡すと、手で電話の形を作り、耳元でその手を動かして、私に出るという合図をした。

「もしもし?」

「もしもし?」

電話越しに聞こえたのは、男の人の声だった。誰だろう...?

さっき言っていた憧れの先輩だろうかと思っただけ。

「あれ...? 今野...? じゃないよね...」

「え、はい…。あの…」

相手が誰だか分からずに戸惑う私を、裕子にはにんまりとした表情で楽しげに見ている。

私は、声には出さず「誰？」と裕子に尋ねていたけれど、裕子はそんな私を見てさらに面白がつて、そっぽを向いて知らん顔をされてしまった。

「え、あの、俺、水野だけ…」

「えっ…。あっ…。み、水野君？」

「うん。もしかして、秋山？」

「…うん」

相手は水野君だった。

そして、相手が分かったところで、私はもう一度裕子に物言いたげな視線を送ってみたけれど、それに対して裕子は、スッと立ち上がると「先生に見つからないようにね」と言い残して、部屋から出て行ったしまった…。

「あ、あの、ごめんね…。裕子が勝手に掛けて…」

「あ、そうなんだ…」

「うん。あの、だから、切るね」

携帯を持ってきていいのは各班の班長だけという決まりだし、緊急時の連絡以外には使つてはいけない決まり。水野君と裕子は二人とも班長だから、前者には引つかからないとしても、今のこの状況のどこに緊急性があつただろうか…。

非常事態があるとすれば、急に携帯を渡されて出てみたら電話越しに水野君が居たという私の気持ちだけだった。

「……待つて」

返事を待ちつつ、ボタンに向かって伸びていた親指の動きが止まった。

待つて…？

切らないで…？

「今、こっちの部屋誰も居ないんだ。そっちは？」

「うん。こっちも…」

「まだちよつと時間あるし、ちよつとだけ、話さない…？」

「……うん」

改まって「話そう」と言われると、何だか妙に緊張してしまう。

いつしか近付いていた感覚も、いつしか縮まっていた距離も、すべてが最初の頃のように、どこかよそよそしくなつて、それは水野君も同じようで、話題を振ってくれてはけれど、その声は少し震えていた。

「あ、そうだ。今日撮った写真、後で俺にもくれる？」

「金閣寺のやつ…？」

「うん」

「うん。現像したほうがいい？それともデータのままでいい？」

「あー…。俺、パソコン苦手なんだよね…」

「じゃあ、写真にして、焼き増しして渡すね」

「あ、でも…」

「うん？」

「パソコン使えたほうがいいから…」

その、嫌じゃなければ…。今度、教えてもらえないかな…」

「うん。いいよ」

水野君は頭も良いし、パソコンも使えるものだと思っていた。
だからちよつと意外で、せっかくだから、私も教えてあげたいと思
った。

「マジ？ 良かったあゝ。他に頼めそうなやついなくてさあ…。

あ、ごめん。皆夕飯行くみたいだから、俺も行くね。

また向こうで」

「うん。またね」

何でだろう…。

電話はもう切れたのに、早くなつた鼓動が静まってくれない。
そのうちに裕子が戻ってきて、食堂へと一緒に行つたけれど、収ま
らない高鳴りのせいで、美味しそうな夕食もあり喉を通らなかつ
た。

それは、温泉に入つてゆつくりすればまた元通りになるだろうかと思
つたけれど、部屋に戻り、敷かれていた布団の中に潜り、裕子
や杏ちゃんとおしゃべりをしていても、一向に収まってくれる気配
は無かつた。

スースーと二人の寝息が聞こえてくる。

さすがに一日中はしゃいでいたら疲れたのだろう。

定番とも言える枕投げも恋話もそこそこに、二人は眠つてしまつて
いた。

そして、そんな二人の寝息を聞いていた私はすっかり寝そびれてし
まっていた。

さすがに夏も近くなつてくると、掛け布団が暑い。

なんだか顔が火照つて、喉も渴いてきた。

こんなことならお風呂上がりには何かジュースでも買っておくべきだ
つたと私は後悔をした。

どうしよう…。

今から買いに行こうか…。

枕元の腕時計を見る。針は23時45分を指している。

もう先生達の見回りは終わったかな…？

もし見つかったら、でも、ちゃんと理由を言えいいかな…？

そんな不安も抱きつつ、でも私は布団を出て、上履きを履き、部屋のドアに手を掛けていた。

キイイ

少しずつ慎重にドアを開けているのに、音が出てしまった。

まずは、恐る恐る廊下の様子を確認する。

真っ暗な中に誘導灯の緑がぼんやりと浮かんでいる。

誰も居ないことを確認して、ドアをまた少し開け、ゆっくりと部屋の外に出る。

そして、足音を立てないように、この階の一番端の階段からロビーへと降りる。

時々、どこから響いた声が聞こえてくる。

下の階には男子の部屋がある。まだ起きている人が居るのだろう。

素直に部屋に近い階段から降りていたら、きっと先生にも見つかってしまっていたかもしれない。

だから私は、廊下を歩くというリスクを冒してでも一番遠い階段を選んだ。

それが功を奏したのか、幸いロビーに辿り着くまで誰にも会うことはなかった。

ロビーには明るさを落としながらもまだ電気が点いていた。

しかし、フロントには誰も居らず、ロビー全体を見回しても誰の姿も無かった。

今がチャンスとばかりに、私は足早に自動販売機へと向かい、ピツ

タリ170円を投入する。

200円を入れて30円のお釣りを出すよりも、こっちのほうがお金の音を鳴らす回数が1回少なくて済むのだ。

ガチャン！と大きな音を立てて、ペットボトルが落ちてくる。この音ばかりは仕方が無い…。

ふう。と思わず息が漏れて、気が緩む。

その場でキャップを開け、一口だけ口に含み、喉を潤す。

よし、あとは部屋に戻るだけだ。

そして、また同じ道に戻ろうと振り返ろうとした瞬間

「こら！ 何してるんだ？」

うわぁ…。

見つかってしまった…。

「すみません…」

私は声のした方に向かって頭を下げて謝った。

「なんちゃって」

「えっ…？」

腰を曲げた状態のまま、顔だけを上げて、声の主を確認してみる。

「あっ……」

そこに立っていたのは先生ではなく、水野君だった。

「秋山も何か買いに来たの？」

「えっ、うん。水野君も…？」

「俺は、罰ゲームで…」

「罰ゲーム？」

「まだみんな起きててさ、大富豪やってたんだよ。

で、俺負けたからジュース買いに来させられてさ…。

でも…これなら罰ゲームじゃなくなっただけかな…」

私とは正反対に、200円を入れてジュースを買っている水野君。
なんだか一人で先に戻ってしまう気分にはなれなくて、私は辺りの
様子を気にしながらも、それが終わるのを待っていた。

「待ってたの？」

「うん、なんとなく…」

「でも、ほら、もう時間だよ？」

何の時間なのか。意味も分からずに私は水野君の腕時計をのぞき込
んだ。

「23時59分。お姫様は帰らなくっちゃ」

そういうことか…。

「まあ…二人で見つかったら言い訳できないっしょ」

「ああ…。うん…。じゃあ、戻るね」

「うん。おやすみ」

「おやすみ」

その後、水野君は無事に部屋に戻れたのだろうか…。

それは先に戻った私には分からなかった。

もしかしたら先生に見つかって、お説教を受けてしまったかもしれ
ない。

でも翌日、水野君はいつものように元気そうに笑っていた。

そして、帰りのバスの中。杏ちゃんと林君が一番後ろの席に陣取ってしまったから、仕方なく私と裕子と水野君も並んで一番後ろの席に座った。昨夜眠れていなかった私は、発車してまもなく隣の裕子の肩を枕にして眠ってしまい、気が付くとそこは、トイレ休憩に立ち寄ったサーブスエリアだった。

裕子に一度起こされたけれど、私は大丈夫とだけ答え、再び眠りに就き、そして、幸せな夢を見た。

夢の内容は憶えてはいない。

枕が少しだけ高くて硬くなったような気もしていたけれど、でも、幸せな夢だった。

約束してもいいですか…？

「ねー。今からカラオケでも行かない？」

「えー…。もう9時だよ…？」

「ちょっとだけ！ ね？」

「えー…」

せつかくの夏休みだというのに、連日の夏期講習。

毎日、塾に缶詰にされていた裕子の我慢もそろそろ限界が近付いている。

しかし、時間はもう夜の9時を回っており、日が長いとは言え、すっかり暗くなつた空を見上げながら、早希は裕子の誘いを何とかかわそうとしていた。

「夏期講習が終わったら、ね」

「それじゃ遅いのよ…」

「受験生なんだから、仕方ないよ…」

「受験なんかいいのっ！」

「裕子…」

迎えの車を待ちながら、かれこれ10分は同じようなやり取りが続いていた。

早希もこれほど迎えが待ち遠しく思ったことはなかったであろう。

しかし、無情にもこんな日に限って、少し遅れるというメールが早希のもとには届いていたのだった。

「お疲れー」

「お疲れさま」

迎えを待つ二人の姿を見つけ、後から授業を終えた水野が声を掛けた。

「水野。あんたも説得しなさい」

「何を？」

「この子がどうしてもカラオケ行かないって言うの！」

「何で？ 行かないの？」

「今から行こうって言うんだもん。それは無理だよ……」

「夏期講習が終わるまで行かないって言うのよ」

「でも、俺達受験生だし……」

「ほらー。水野君だってそうじゃん！」

「水野、あんたどっちの味方！？」

「それは……」

まさかこんなことになるうとは思ってもいなかった水野は、戸惑いを隠しきれなかった。

どうにか自分を味方に付けようとしている裕子と、自分が味方になつてくれるとすでに確信している早希の間に挟まれ、水野は一度、天を仰いだ。

「味方って言うか……。こっちな……」

早希の後ろに回り、パンツと軽く早希の両肩に手を置いた。

それを見た裕子は驚きながらも逆上し、その手をすぐさま払い除けると、早希の腕を引き自分の方へと寄せ、今度は自分が全く同じことをして見せた。

「あんたなんか早希はあげないんだからねっ！」

「えええ……。ってか何でだよ」

「何でもかんでも！ 早希は私の味方なの！」

「ちょっと…裕子…」

「ああ、分かったよ…」

折れた水野を、勝ち誇った表情で見下ろす裕子。

もう何が何だか訳の分からなくなった早希は、ただただ親の到着を願うばかりだった。

「ってか、遊びたいならライブ行く？」

「ライブ？」

「前に言ってたやつ？」

「そうそう。知り合いの人に頼めば、

今からでもライブハウスのチケット取れるかもしれないから」

「水野！ 何でそれを早く言わないの！」

「そんな隙無かっただろ…」

ライブの話題になった途端、先ほどまでの帰りたいたいという気持ちがまるで嘘であつたかのように、早希の気分は180度入れ替わった。

「行く！ 行きたい！」

「おっ。マジ？」

「早希が行くなら私も行くわ」

「じゃあ、今夜にでも早速聞いてみるよ」

「杏の分もちゃんと取ってよね？」

「分かってるって。ちゃんと五人分取れるかどうか聞いてみるよ」

そう言くと、水野はポケットから携帯を取り出し、早希に向けてそれをかざした。

「赤外線。俺のアドレス教えとくから」

「あっ、うん」

早希は急いでカバンから携帯を取り出すと、慌てながらボタンを操作し、水野の携帯に自分の携帯を近付けた。

「何かあったら秋山に連絡するからね」

「えっ、私に!？」

「うん。だって、そのために教えたんだし」

「あっ、じゃあ、ちょっと待ってね」

受信したアドレスに宛てて、早希は早速メールを打った。

「今、メール送ったから」

「赤外線の方が早いのに」

「ううん。こっちが良かったの」

それからまもなく、水野の携帯が鳴り、早希からのメールを知らせた。

メールを開き、本文を読む。

たった今自分の送ったメールを、目の前で読まれている早希にとっては、なんだかとても恥ずかしく、その数秒の間が、何倍にも増して長く感じていた。

「あんまり、読まないで…?」

「あ、うん。ごめん。ちゃんと届いたよ」

「うん」

こんな二人のやり取りをまざまざと見せ付けられた裕子は、ようやくここで割って入ることが許された。

「じゃあ、水野が早希に連絡して、早希が私達に伝えるってことで

OKね」

「うん。OK」

「じゃあ、私、迎え来たから帰るわ」

「うん。また明日ね」

「お疲れ」

二人に手を振りながら迎えの車に乗り、裕子は帰っていった。

そして、裕子を見送った直後、早希にもようやく待ちに待った迎えが現れ、同じように手を振りながら水野と別れ、車に乗り家路に就いた。

「早希ー。携帯鳴ってるよ」

夕食の後片付けをしていると、リビングの方で母の呼ぶ声が聞こえた。

もしかしてという期待と、相手を知られたくないという焦りから、母に携帯を取られる前にと、全力で携帯に駆け寄り、その勢いのまま、階段を一気に駆け上って、自分の部屋のドアに鍵まで掛けてから、受話器を取った。

「…もしもし？」

「あ、秋山？ 俺」

「うん。えっと…。こんばんは」

「何でそんなよそよそしいの。ってか、息切れてるけど大丈夫？」

「うん。平気…」

水野に指摘され、ようやく自分がそれほどに慌てていたことに気づき、とにかく落ち着こうと、早希はお気に入りの赤いクッションを手にはベッドに上り、壁を背にしてもたれ掛かった。

「さつきはメールありがとね」

「うん」

「俺も楽しみにしてる」

「うん。私も」

「それで、さ。ライブのことなんだけど…」

電話越しの水野が緊張していることは早希にも伝わっていた。

直接顔が見えている時とはまた違った緊張。

声とともに、相手の息遣いまでもが間近に感じられる。

そして、修学旅行とも違う。ここは自分の部屋。

自分にとって最も居心地のいい場所、自分が一番素に戻る場所。

そんな空間であっても、これだけ相手を間近に感じてしまう、電話の存在。

そんなことを意識すればするほど、互いの緊張は高まるばかりだった。

「一応、余ってるチケットはあるみたいなんだけど、

夏休み中じゃなくて、9月とか10月になっちゃうみたいなんだよ…。

でも、それでも良ければ行きたいなって思うんだけど、どうかな」

「うん。私はそれでもいいよ」

「じゃあ、今野と上原にも聞いてもらっていい？」

「うん」

これで用は済んだかと、早希の緊張が一瞬だけ解れた。

しかし、水野はそれで話を終えることなく、さらに続けた。

「それで…さ…」

それは、先ほどまでよりもさらに震えた声。
何かあったのか。何を言おうとしているのか。
早希には全く見当も付かなかった。

「12月にも、ライブがあるんだよね…」

「12月…」

「うん…。みんな受験だし、俺達も受験だし。
たぶんみんな揃っては行けないと思うんだけど…。
でも…」

でも…。

その次の言葉が発せられるまでに、しばらくの間が生まれていた。

「でも…。二人とかなら…。どうかな…」

「二人…?」

「だから、その…。俺と…秋山で…」

それは、紛れも無い、水野から早希へのデートの誘いだった。

「…うん。あの…。行きます」

「ほんと!?!」

「うん。…行きたい」

電話越しにガサガサと何やら物音が聞こえたと思うと、遠くに水野の叫ぶような唸るような声が聞こえ、そして再び受話器を握ったような音がすると、先ほどまでとはまるで別人のような水野がそこにいた。

「ああ…。もう、すごい緊張した」

「何、叫んでたの? 笑っちゃった」

「笑うなよ」

「だってー」

笑うなと言いつつ、そんな水野も早希につられて笑っていた。

緊張が完全に解れ、もう会話と言つよりは、お互いにただ笑い合っているだけ。

でも、それがとても楽しくて、心地良くて、二人はその後もしばらく長電話を楽しんでいた。

気が付けば、0時を過ぎ日付も変わっていた。

電話を終えた早希は、そのままベッドに倒れ込み、すべてが満たされたような満足感を感じながら、心地良い眠りへと落ちていった。

立ち止まってもいいですか…？

「ねえ！ 私達友達だよね！？」

「何よ、いきなり…」

「友達だよね？ 親友だよね！？」

「当たり前じゃん。ってか落ち着きなよ」

いつものように裕子と杏とともに歩く帰り道。
突然足を止めた早希は不安そうに焦るように、二人に尋ねた。

「急にどうしたのよ」

「ううん…。ごめん。何でもない」

「何でもなさそうには見えないんだけど…」

「話せないんじゃないか、私達親友じゃないかもね」

「うう…」

自分から言ってしまった手前、そんな風に返されてしまうと、早希も話さざるを得なくなってしまう、思いつめた表情のまま、事の一部始終を二人に話し始めた。

「あー！ みーつけた！」

「きゃっ！？ だれっ！？」

聞き慣れない声に後ろから突然抱きつかれた早希は、思わず悲鳴をあげ、必死に後ろを振り返ろうとした。

「わ・た・し・？」

「ええ…？」

何とか腕を解き振り返ることの出来た早希だったが、その招かれざる客の顔を見るや、一気に青ざめた表情になっていくのが自分でも分かった。

「ああ…。香川さん…。えつと…。何…？」

「良かった。名前は覚えててくれたんだね」

忘れるわけが無い。と早希は思った。

あんな場面に遭遇して、あんな強引な誘惑をされて。

それが早希の脳裏からそんなにすぐに離れるはずが無かった。

「何って言うか、可愛い子がいるなあって」

「そう…。あ、ごめんね。私、急いでるの…」

「…ダメ」

踵を返し、すぐにでも立ち去ろうとする早希の腕を優衣が掴んだ。

「ちょっとだけ。ね？」

「でも、私、そういうのじゃないから…」

そんな何気ない一言。

しかし、その一言が優衣の心を抉り、逆鱗に触れてしまっていた。

「そういうのって何？」

「えつ…。だから、その…」

誘惑の視線が一転、刺すような鋭い眼光に変わり、早希はもう目を合わせることすら出来なかった。

「アンタもアイツと同じ言い方するのね」

「アイツ…?」

「今日子よ」

「えっ? 瀬尾さん?」

「アイツも同じ言い方してた。私はそういうのじゃない。って」

「えっ? でも…。あんなに仲良さそうだったのに…」

自分が見たキスシーンは何だったのか。

二人は当然仲が良くて、いわゆる恋人同士だからあんなことをしていた。

そう信じて疑わなかった早希にとっても、それは信じ難いことだった。

「私を利用してたってことよ。」

私と上手くやってれば、男子からの評判は下がらない。

私はそんなに意識してなかったけど、アイツはどうしてもトップの座が欲しかったってわけ!」

「そんな…」

可哀想だと思って同情して、さらに逆撫ですることになれば逆効果。かと言って、優しい言葉を掛けて、好かれてしまうことも好ましくはない。

次の言葉が見つからぬまま、早希はしばらく優衣の独り言をただただ聞いていた。

「まあ、私が本音を知ってるってことはアイツはまだ知らないから、この事は絶対に誰にも言わないでよね」

「うん…」

本音を知ってしまったても仲良しでいようとする優衣の気持ちは、早希には理解できなかった。

そんな状態を続けるのは、ただ自分がつらいだけなのに、何故、優衣はそうまでして今日子にこだわるのだろうか…。

もしかしたら、優衣も優衣で今日子を利用しようとしていたのだろうか…。

そんな憶測さえ浮かんでしまう自分を嫌いながら早希は優衣と別れ、裕子と杏のもとへと戻ったのだった。

「で、言っちゃダメって言われたのに、言っちゃって良かったの？」

「裕子と杏ちゃんなら、誰にも言わないって分かってるから…」

「まあ、利用するとか利用されるとか、そういうのはよく分かんないけどさ。」

でも、それは恋人でもなければ友達でもないよね」

「杏の言う通りだと思う」

「友達って…何なのかな…」

相手を利用する、相手に利用される。それでも友達だと思えば友達なのか。

キスをしたら恋人なのか、友達同士でもキスをするのか。どこからが友達で、どこまでが友達なのか。

結局のところ、早希にはそれが分からなくなってしまっていたのだった。

「うちらは友達？」

「うん。友達」

「クラスみんなは？」

「仲良い子もいるけど、そうじゃない子もいる…」

「あんまり仲の良くない子は友達？」

「ただクラスメイトっていうだけかも…」

「じゃあ、仲の良い子は？」

「それは友達」

「じゃあ、水野は？」

「水野君は…。たぶん、友達…？」

何故、そこだけ名指しなのか。

しかし、そんなことが気になる前に、早希は自分の答えに疑問を感じていた。

「たぶん？」

「うん…。たぶん…」

「友達じゃないかもしれないってこと？」

「うん…。友達って言うか…」

自分の中で、水野の存在が友達の枠に収まっていなかったことは分かっていた。

しかし、それならば、どこに収まってくれるのか。

早希はそれにはまだハッキリとした答えを見つけることが出来なかった。

「友達って言うか…？」

「まあまあ、裕子。それ以上は酷ってもんよ」

「せっかくいいとこなのになぁ…」

真剣に聞いているのか、面白がっているのか。

しかし、そんな声も早希には届いていなかった。

答えが知りたい。

友達とは何なのか。自分と水野は友達なのか。いくら考えても解けぬ問題に、悩む早希は裕子と杏の間を割るようにして、再び歩き始めた。

そんな姿に面を食らった二人は一瞬顔を見合わせ、すぐに早希の後を追いつ、様子をうかがった。

「早希？大丈夫？」

「うん…。でも、分かんない…」

「じゃあ、さ」

俯く早希に顔を上げさせるように、裕子は腕組みをして、その進路に立ち塞がった。

「聞いてみればいいんだよ。直接」

「水野君に？」

「そう。それで、決めてもらえばいいのよ！」

納得したかしくなかつたか、早希は「うん」と頷いた。

裕子の言つた意味が早希に理解できていたのか、杏は心配ではあつたが、これ以上早希が一人で考えて悩んでしまうよりは、その方が良いつのかとも思いつ、あえて口を挟もうとは思ひなかつた。

「ま、水野ならそれくらいの答えは知つてると思つよ」

「そうかな…」

無責任な言葉だとは思いつつも、それで早希が少しでも安心するのであればそれでいいと裕子は思つた。

「はい！ 帰りにコンビニ寄つて行く人！」

「先生に見つかつても知らないよ？」

「早希は？」

「えっ…。うん、ダメだよ。一回帰ってからにしょ」

「ちえっ…」

「色気なんだか食い気なんだか…」

「杏？ 何か言つた？」

「空耳でしょ」

「言つた！ 絶対言つた！」

「空耳よ」

「裕子は食い気かもね」

「こらっ！ 早希っ！？」

「あはは」

難しい話もたまにはいいけれど、三人だけでは解けない問題もある。
そんな時は、ただこうして笑い合えたらそれでいい。
誰が言うわけでもなく、でも、三人の心は一つになっていた。

嫌いになってもいいですか…？

雲一つ無く晴れ渡った秋空。

気温23。湿度40%。時折、北東からの風が優しく涼しく吹き抜ける。

今日は、絶好の体育祭日和。

クラスごとの縦割りチームに分かれ、早希や水野達がいる五組チームは、前半戦を終えた中間発表で一組チームに次ぐ二位と好位置につけていた。

そして、昼食を挟んだ午後の後半戦。

最初の種目は、借り物競争。

チームから各学年一人ずつ三人が出場し、時間内に紙に書かれたお題を持つてくることが出来れば、一人につき10点。三年生からは水野が代表として出場し、早速、お題の書かれた紙を手に、チームの応援席に駆け寄ってきていた。

「おう、水野！ お題何だった？」

「ああ、りんたろう。ああ…。男じゃ持つてそうにないな…」

「せっかく水野君の力になってあげようと思ったのにいつ！」

「女子の真似のつもりかよ…」

「女子がいいんなら、そこに杏がいるだろ」

「ああ、じゃ、またな」

水野は林と別れ、今度は近くにいた杏に声を掛けた。

「上原」

「何？ 借り物？」

「秋山見なかった？」

「え？ 早希？ うーん…。見なかったけど…」

「そっか…」

「裕子なら知ってるんじゃない？」

「そっか。サンキュ」

はて、水野は一体何を探しているのだろうか。

早希ならば持っていそうな物。そして、その早希の居場所を知っていそうな裕子。

まるで、何かを紐解いていくかのように、水野は一步一步、手繰るように答えに近付いていった。

「え？ 早希？」

「そう。今野なら知ってるかなって」

「うーん…。特に何も言っていなかったけど…」

「そっか…」

裕子は腕組みをしながら早希の居そうな場所を考え、しばらくすると、パツとひらめいたかのように声を上げた。

「保健室かも！」

「保健室にいるの？」

「なんか、しきりに手首の様子気にしてたから。もしかしたら？」

「怪我したってこと？」

「うん。わかんないけど。もしかしたら…ね」

「そっか。じゃ行ってみるよ」

「うん。頑張れっ」

裕子と別れると、水野は急いで保健室へ向かった。

校庭を横切り、一番近い昇降口から上履きにも履き替えることなく校舎に入り、靴下のまま、滑る廊下に苦戦しながらも廊下の角を曲

がり、脇目も振らず、ただ保健室を目指して長い廊下を走っていた。

「はあっ…はあっ…はあっ……」

サッカー部でならした水野であったが、保健室のドアに手を掛けた頃には、さすがに息があがっていた。

ガラガラガラ

もしかしたら中には病人もいることだろう。

焦る気持ちを抑えながら、ゆっくりとドアを開け、まずは首だけを少し入れて中の様子を確かめた。

「あっ」

「あっ…」

目が合い互いを確認し合うと、水野はドアを広げようやく全身を保健室に入れた。

「どうしたの？ 水野君も怪我？」

「いや、俺は全然。」

「ってか、秋山こそ何してるの？」

水野がその光景を不思議に思ったのも無理はない。

保健委員でもない早希が、他の子の怪我の治療をしてあげていたのだから。

しかも、それは見るからに一人だけではないようで、突き指をした子、膝をすりむいた子、足首を捻挫した子、他にも何人分かの記録がノートに書き込まれていた。

「先生がちょっと忙しくなっちゃって、私が代わりに…」

「それは分かるけど…。保健委員を呼べばいいのに」

「怪我してるのに、待ってて言つのも可哀想なうて」

「そうだけどさ…。まあ…いいや」

水野はまだ何か少しだけ言い足りないようではあったが、とにかく早く役目を終わらせてしまおうと、早希を手伝った。

「これで大丈夫」

「ありがとうございます」

「帰ったらちゃんと病院にいつて、先生に診てもらってね」

「はい。ありがとうございます」

最後の子が出て行くと、保健室には二人だけが残された。早希は、んーっ！と伸びをして、自分も帰ろうかといった意気で立ち上がったが、水野はそれを許さなかった。

「うつ……」

水野に手首を掴まれた早希は、痛みに顔を歪ませて、うずくまってしまった。

「これは？ 何？」

「い…痛いよ…」

「秋山も怪我してたんじゃないの？」

「これくらい大丈夫…」

「ダメ！」

優しくしては早希が従わないと感じた水野は、そのまま早希の

手を引き、引っ張っていったその勢いのままベッドに投げた。

「そこに居て」

「はい…」

抵抗することも出来ずベッドに投げられ倒れこんだ早希は、その乱暴な仕打ちに言葉を失い、体勢を立て直した後はもう水野の様子をただ見ているだけしか出来なかった。

「手、出して」

「はい…」

湿布と包帯とテープを手に戻ってきた水野は、早希に患部を見せることを要求し、早希がそれに従うと、強弱をつけながら少し腫れた手首を指で押し始めた。

「ここは？ 痛い？」

「そこは痛くない」

「ここは？」

「痛い」

「ここは？」

「さっきよりは痛くない」

最も痛む部分を中心に湿布を貼り、そこを起点にして包帯を巻く。一度手の平へ向かい、そこから戻って腕へ。

手首を固定して、包帯が解けないように、しっかりと丁寧に。時々、巻き直しながら、水野は早希に話し掛けた。

「秋山は、遠慮しすぎ」

「えっ…。そうかな…？」

「俺、保健委員なんだけど」

「うん。知ってる…」

「言ってくれば、いつでも来たんだけど」

「うん。でも…」

包帯を巻き終え、解けないように端をテープで留める。

しかし、処置が終わったにも関わらず、その手は早希の腕を握ったまま離そうとしなかった。

「どうせ、また迷惑かもとか考えたんでしょ？」

「うん。水野君、借り物競争に出なきゃいけないかったし…」

「そんなのどうでもいいよ。」

って言うか、俺、本当に秋山が俺のこと友達って思ってくれてるのか、時々分からないんだよ…」

そんな水野に、早希は咄嗟に「ごめん…」と謝った。

「ごめんって何…？」

「不安にさせちゃったのになって…」

「謝られたら、なんか余計に辛いだろ」

「うん…。でも、水野君は友達だよ。」

うん…。友達って言うか…」

そこまで言い、しかし、まだ早希にはそこから先の言葉が無かった。

「友達って言うか…？」

聞き返された早希は裕子の言葉を思い出し、それを言った。

「分かんない…。だから、水野君が決めてほしい…」

水野はその言葉に一瞬だけ動揺したが、すぐに冷静を装って早希に聞いた。

「じゃあ、質問。」

友達より、上？下？」

「たぶん…。上…」

”上”という言葉聞いた水野は、早希の腕を握ったまま立ち上がり、一步、二歩。足を広げて早希の両足を跨ぐと、握った腕を早希の方へ押し、同時に自分の顔を早希の顔に近付けた。

その圧力に負けた早希は、たまたまその顔を避けようと、腕ごと体の押されるままにベッドに倒れ、何とか難を逃れたかのように思われたが、早希が倒れる速度と同じ速度で水野の体が覆い被さり、早希は、むしろもうこれ以上逃げ場の無いほどに追い詰められてしまっていた。

倒れた勢いで、黒く艶やかな髪が、白いシートに乱れて広がっている。

水野の右手は早希の左腕を掴んだまま、その胸元に押し付けられ、水野の左手は早希の顔の横で、力強くその体を支えると同時に、早希の自由をも奪っていた。

「俺が決めていいんだよね…？」

そう言い終わるか終わらないかのうちに、水野は再び顔を近付けた。

早希はどうか少しだけでも抵抗を試みようとはして見るものの、すでに体の自由は奪われ、言葉を発しようにも、声さえも出てこな

かった。

次第にその距離をなくしていく二人の顔。

真っ直ぐに目と目を合わせながら、互いの吐息を感じる距離にまで迫る。

しかし、そこまで近付いたところで、早希が突然顔を背け、水野を拒んでしまった。

「……イヤ」

辛うじて発せられた声。

一筋の涙とともに流れ出たその声は、水野の耳にも確かに届いていた。

「……何で」

「……やめて」

唯一、自由のあった右手を動かし、水野の左腕を掴んで懇願する。しかし、水野はそれを聞き入れず、逆に早希の右腕を掴み返すと、ベッドに押し付けた。

「決めてって言ったのに、今さら逃げるのは無しだよ」

「離して……！」

完全に自由を奪われた早希は、必死に両手両足を動かし、何とか水野を振り解こうとしたが、水野も負けじと早希の動きを封じ込めていた。

しかし、水野が早希を制していたのもわずか、靴下のままここへ来ていた水野の足が滑り、バランスを崩した一瞬、早希の右手を封じていた水野の左手が離れた。

パシンッ

それは、見事に水野の頬を打ち抜き、その力を一瞬にして抜けさせた。

滑ってバランスを失っていた水野は、そのままベッドから転げ落ちて床に倒れ、そこでようやく、自分のしよつとしていたことに気が付き、頭を抱えた。

「……最低」

体を起こし、そう吐き捨てて早希は去っていった。

残された水野も体こそすぐに起こしたが、立ち上がる力は、もはや残されていなかった。

遠くに聞こえる借り物競争の残り時間を告げるアナウンス。

しかし、もうそんなものはどうでもよくなっていた。

そのまましばらく床に座り、何を考えるでもなく、ただ後悔に暮れる。

実際にはたった1〜2分だったのかもしれない。

しかし、自分を心配して後を追ってきた裕子によって現実を引き戻されるまで、水野にはその時間が途方も無いほどに長く長く感じていた。

「何かあったの？」

「いや……」

「早希は？ 会えた？」

「ああ……。うん……」

ようやく立ち上がり、しかし心配する裕子には目もくれずに水野は

立ち去った。

「水野。何か落ちたよ？」

「捨てて…」

何を落としたかも確かめず、それ以上誰とも関わりたくないと言わんばかりに、水野はそう言った。

残された裕子は、水野の落としていったその紙切れを拾い上げ、一応、大切なものであつてはいけないと中を開いて確認した。

「……捨てられるわけ無いじゃん」

裕子はそれをもう一度折りたたみポケットにしまつと、早希を探すため、保健室を出た。

秋晴れだった空は、いつしか暗雲立ち込める嵐の様相を呈していた。

逃げてしまってもいいですか…？

半年間クラス一丸となって目指してきた三冠の夢は絶たれた。

たった5点。されど5点。

私達はその5点の差に泣いた。

体育祭が終わって、もう一週間以上が経った。

三冠の夢は絶たれてしまったけれど、クラスはまた一丸となって、最後のタイトル、文化祭に向けての準備を始めている。

でも、私はまだ気持ちを切り替えることが出来ていなかった。

たら・ればは言いたくない。

でも、もし私がああの状況を受け入れていたら…。

そう考えると、たった5点の敗北は、私の責任であるように思えてならなかった。

聞いた話によれば、水野君は借り物を見つけられずに時間切れになっってしまったらしかった。

直接それを見たわけではなかったけれど、裕子が言っていたのだから、たぶん嘘ではない。

それどころか、裕子によれば、水野君は時間切れになるその直前まで保健室にいらしい。

ということは、つまり、それは私と別れた後もずっとそこにいたということだった。

私も反省はしていた。

翌日になっても赤く腫れていた頬。

ぎこちない挨拶を交わしただけで、それ以上の会話はしなかったけれど、気に掛けてはいた。

でも、当の本人が先頭に立って、文化祭に気持ちを切り替えて頑張ろうと言っていたから、その時は私も、そうしよう。と思った。

でも…。

それから何日が経っても、私達の間にも生まれてしまった溝は埋まることは無かった。

お互いに遠ざけるようになってしまったわけではない。

ただ、これといって、必要以上の接触が無くなってしまった。

もしかしたら、嫌われてしまったのかもしれない。

そう思う私は、自分のしてしまったことを悔やみ、自分を責めることしか出来なくなっていた。

コッソン！

何かが私の頭に当たった。

ボーっと考え事をしていた私は、それによってようやく現実を引き戻された。

「なかなか上手く出来たと思わない！？」

ダンボールを切って、アルミホイルを巻いただけの剣。

そんな誰にでも出来るクオリティの物を自慢げに見せてくる裕子に、私は返す言葉も無かった。

「手が止まってる」

「ごめん…」

そうだ。私は色塗りを任されていたのだ。

押し付けられたままの筆先は、くの字に曲がり、先に塗り終えていた部分の絵の具はもう乾ききっていた。

「何かあった？」

「ううん。何も…」

そう返したところで、裕子がすべてお見通しだということくらいは分かっていた。

「早希。ダンボール貰って来てくれない？」

「私が？」

「委員長の責務よ」

「もう…。こういう時だけそういう言い方しないでよ…」

それでも私は渋々立ち上がり、「どれくらい？」と裕子に聞いた。

「ああ。どれくらいってか、向こうの人があるだけ用意してくれるから」

「向こうって、どこの人？」

「ホームセンターの人」

私はてっきり先生のところへ貰いに行くのだと思っていた。
だから、それが学校の外だと分かった瞬間、急に一人では心細くな
ってしまった。

「一人で…？」

「付き添い欲しい？」

「うん…。出来れば…」

「よしっ！」と立ち上がった裕子は、迷うことなく彼に声を掛け、振り返った彼は、一瞬だけ私の方を見た。

「俺…？」

「他に水野って名前の人いる？」

「いないけど…」

「じゃ、よろしく」

裕子が水野君にどんな頼み方をしたのかは分からない。

でも、それが私達を元の鞆に収めようとしていることだけは分かる。

私だって、普通に接したいし、また元のように笑えればそれが一番良い。

でも、完全に元通りになることはもう出来ないんだと薄々は感じている。

それが良い方向だろうが悪い方向だろうが、私次第なんだということも。

たぶん裕子は、それが良い方向になるようにしてくれているのだと思う。

でも、それが上手くいくのかは分からないし、それもまた私達次第。

だから怖い。

このままで良いとは思わないけれど、もし悪化させてしまったらと思うと、何も出来ない。

最小限の接触と最大限の気遣い。

教室を出てから学校のすぐ近くのホームセンターに着くまで、私達に会話は無かった。

水野君が店員さんと話をしている間も、私は少し距離を置いて、その様子をただ見ていた。

店員さんが持つてきてくれたダンボールを、前後に分かれて二人で持つ。

「行くよ」と声を掛けてくれて、私は「うん」と返した。

それが唯一の会話。

それから教室に戻るまで、見えていたのはジャージ姿の水野君の背中だけ。

一度も振り返ってはくれなかった。

でも、気に掛けてくれてるのは伝わってきた。

教室に入ってダンボールを置くなりどちらからともなく距離を置いてしまった私達を見た裕子は

「ハア…」と溜め息をついたけれど、たぶんこれで良かったんだと思う。

言葉は無くても、心は少しだけ通じ合った。

お互いが何を考えて思っているかが全く分からなくなってしまった今、それには大きな意味があったんだと思うし、そう思いたい。

今は文化祭に向けて頑張ればそれでいい。

もしかしたら、文化祭という一大イベントが何とかしてくれるかもしれない。

それが逃げているだけなのは自分でも分かっている。

でも、今はそうさせてほしい。

考えても見つからない答えを無理矢理探しに行つて、更なる深みにハマってしまうよりは。

「早希？　なんか顔色悪いよ？」

「ちよつと疲れたみたい……」

「保健室行く？」

「ううん。大丈夫……」

保健室には行かないほうが良い。

私はなぜか直感的にそう思ってしまった。

期待してもいいですか…？

「私、知らない」

「自分で何とかすれば？」

裕子…？

杏ちゃん…？

「ごめん…。さよなら」

水野君…。

何でみんな、そんなに冷たいの…？

ねえ……。

悪い夢から醒めると、私の体は汗でぐっしりと濡れていた。これだけ汗をかけば、熱も少しは下がってくれただろうか…。力の入らないまま、重い頭と軋む体をなんとか起こして、私は時計を見た。

11時30分。2時間目か…3時間目か…。

ああ…。今日も学校を休んでしまった…。

でも仕方ない。インフルエンザにかかってしまったのだから。

タオルで汗を拭き、ボーっとする頭でふらつきながらも着替え、またすぐに布団を被る。

だめだな…。まだ熱は下がってなさそうだな…。

体温計に手を伸ばす気力も無く、直感的にそう判断して、私はまた

すぐに眠りに就いた。

「早希、インフルエンザだつてー…」

「さっき聞いたよ」

朝のホームルームの時に先生が言っていた。

うつるといけないから、お見舞いは控えるように。と。

でも、俺は素直に心配出来なかった。

もちろん、インフルエンザにかかってしまったのだから心配はしているのだけど、それよりも今以上に距離が開いてしまうことのほうが心配だった。

体育祭のあの一件以来、俺は秋山に避けられているような気がしていた。

当然と言えば当然なのだけど、それでも俺はあの時の言葉の意味を何回も考え直していた。

”俺は秋山にとって友達より上の存在で、でも自分では決められないから俺に任せな”

今でもその解釈に間違いは無いと思っている。

でも、秋山は俺を拒んだ。

と、いうことは、俺のその解釈が間違っていたということなのだろう。

じゃあ、あの時、俺はどうすれば良かったのか。
どうすれば正解だったのか。

かと言って、それを秋山に聞くことは出来ない。

俺が自分で見つけなければいけない答え。

それが見つからないまま、中途半端に接していたくはない。だから、避けられて少し距離が開いてしまったのは、俺にとっては特に気を落とすようなことではなかった。

でも、秋山がインフルエンザで休んでしまったのは想定外だった。

少なくとも一週間は、全く顔も合わせられない。

それがこれほどまでに心にぽっかりと穴を開けることになると思ってもいなかった。

もし、その一週間の間に、本当に秋山の気持ちが変わってしまったら。体の心配をするよりも、そっちの方が気が気でないのが、今の本音だった。

「これじゃあ、ライブも行けないかなあ…。」

早希、楽しみにしてたのに…」

アドレス交換をしたあの日、交換したその場で秋山が俺に送ってきてくれたメール。

”ライブ楽しみにしてます。”

俺も行ったかったし、このメンバーで行けるのはこれが最初で最後かもしれないから楽しみだった。

でも、何よりも、そうやって楽しみにしてくれている秋山のためにチケットを取ったり、そんな秋山にもっと喜んでもらおうとすることに心が躍っていた。

でも…。

もし、元気だったとして、俺と一緒にライブへ行ってくれただろうか。

今回のライブは、みんなも一緒だから行ってくれていたかもしれない。

じゃあ年末のライブはどうだっただろうか…。

二人で行こうと約束した。

あわよくばそれをきつかけにと考えたところもあった。
今のままでは、そんな可能性は万に一つ、いや、億に一つもない。
そんな邪な考えを持っている余裕すら、微塵もない。
もしかしたら、キャンセルされてしまうかもしれない。
それはイヤだ。

それだけは絶対に、今からでも避けなければならないことだった。

でも、秋山がまた元気になって学校に来てくれなければ、何をどうすることも出来ない。

俺はただその日を待ち、そして五日が経った…。

ようやくインフルエンザが治って、久しぶりに来ることが出来た学校。文化祭は終わってしまったていて、みんなと約束していたライブにも行くことは出来なかったけれど、何も変わることなく、いつものように一日を過ごすことが出来た。

でも、治ったとは言えもしまだウィルスが残っていたらいけないし、病み上がりだからと裕子や杏ちゃんのおしゃべりも早めに切り上げて、私は教室を出た。

「秋山…。ちょっといい…?」

そして、校門を出ようとした時、私は水野君に呼び止められた。

「うん。何…?」

「ここだとあれだから、ちょっと来て」

どこへ連れて行くのだろう。

不信心は無かったけれど不安になりながらその背中を追い、着いたのは通学路から外れたところにある小さな公園だった。

「座ろ」

ブランコに腰掛けた水野君に促されて、私も隣のブランコに腰掛けた。

「断られるかもって思った」

「そんなことしないよ」

いくらぎこちなくなってしまうてもそれはしない。
それだけは自信を持って言える。

「ライブ、楽しかったよ。今度は一緒に行こうね」
「うん」

途切れ途切れに短い言葉だけを交わしていく。

「寒くない？ もう大丈夫なの？」
「うん。大丈夫」

きつと何かもつと大事なことを言おうとしているんだと感じた私は、
焦る気持ちを抑えながら水野君の言葉を待った。

「俺…心配だった…」
「うん…。ありがとう」
「もう来ないんじゃないかって…」
「大げさだよ。ただのインフルエンザだし」

「違う…。そうじゃなくて……」

水野君が言葉に詰まっている。
私の知る限り、こんな表情は見たことがなかった。

「……嫌われたんじゃないかって」

一瞬、ドキツとした。

嫌われたのは私の方だとばかり思っていたのに、水野君も同じことを考えていた。

「俺、それだけは絶対に嫌だった。
嫌われても仕方ないのかもしれないけど、でもそれだけは嫌だっ
て思った…。」

勝手かもしれないけど……」

「私も…。同じことを考えてた」

水野君も自分が嫌われたとばかり思っていたのだろう。
その啞然とした表情に、不覚にも私は笑ってしまった。

「私は、嫌いじゃないよ」

「なんだよ…もう…。」

俺の思い過ごし…?」

「ううん。お互い様」

カチャンカチャンと揺れる鎖の音とともに立ち上がった水野君は、
程よく緊張が解けたような良い顔をしていた。

「って言うか…。」

「うん？」

「俺が秋山のこと嫌いになるわけないし…」

「うん。ありがとう」

「嫌いつて言うか…。俺は…」

そこまで言いかけて水野君の口が止まり、私もその視線に気が付いた。

「ごめんね。ブランコ乗る？」

ブランコを陣取っていた私達を、指を咥えてうらめしそうに見つめる無垢な眼差し。

近くにお母さんらしい人は見当たらない。一人で来たのだろうか。まだ幼稚園の年少くらいに見えるその子に、私達はブランコを譲ってあげた。

「帰ろっか…」

「そうだね」

「俺は…」の続きが何だったのか。それは分からなかった。でも、きつと悪いことではない。

またいつか水野君がその続きを言える時が来たら、その時は必ず聞こう。

そして、その時が来るのを楽しみに待っていよう。

そう心に決めて、私は彼の隣を歩いた。

「そうだ。これ」

思い出したように足を止めて、水野君はカバンから何かを取り出し振り返った。

それと同時に、ふわりと長いものが巻きついて、かすかな温もりが優しく首元を包んだ。

「冷えるといけないから」

「うん、あったかい。ありがとう」

そのマフラーをキュッと握り締めて、私はまた彼に寄り添って歩いた。

好きになってもいいですか…？

土曜日の学校。

授業が無いから、生徒の姿はほとんど無い。

それは、三年生のためにと特別に開放されていた図書室も例外ではなかった。

受験勉強のためにと開放されているにもかかわらず、今日は私以外誰もいない。

こんなにたくさんの本とこんなに広い空間を独り占めしている。

それは贅沢でもあり、寂しくもあり…。

だからせめて人の足音くらいは聞こえるようにと、私はドアを開けっ放しにして英語の参考書と戦っていた。

「ここ、いい？」

不意に掛けられたその言葉が、私の記憶とデジャヴする。

「だめ？」

「あつ、うん。いいよ」

額に手を当てて、必死に記憶を辿って思い出そうとしてみる。でもそれはやはりデジャヴであって、それがいつどこであった出来事なのか思い出すことは出来ない。

「どうしたの？」

そんな私を心配してか、隣に座った水野君がコートのボタンを外しながら私の顔を覗き込んだ。

私は「大丈夫」と返してまた英語の参考書と向かい合ったが、それ

でもまだデジャヴの跡は消えず、私はもう一度ペンを置いた。

「うう……」

「具合悪いの？」

「違う…。デジャヴ…」

そう聞いて安心したのか、水野君はコートを脱ぐと表情を和らげて言葉を続けた。

「もう心配しちゃったじゃん。ってか一人？」

「うん。そう。今日は誰も来なくて…」

私は机に突っ伏したまま答えていた。

話しながらもまだデジャヴのことが気になって頭から離れず、それが何かとても大切な記憶だったような気がしてならなかった。

「何やってたの？」

「英語」

「見せて？」

「うん」

促されて私は起き上がり、顔で覆い隠していた参考書を手渡した。

「長文かー」

「長文苦手なの…」

乱れた前髪を直しながら答える私のその額の辺りで明らかに水野君の視線が止まっていた。

「何？」

「いや…」

「前髪つぶれちゃった…」

「ちよつと…」

そう言っていると水野君は私の手をどかし、前髪をかき上げて額を露にした。

「ちよつ…」

「あはは。やっぱり」

「何がっ!？」

「おでこ赤くなってるよ」

おでこを笑いながら人差し指でツンと突かれると、もうおでこの赤なんて赤で無いくらい真っ赤になるほど、恥ずかしさで一瞬にして顔中から火が出た。

「やめてよね…」

「怒った？」

「怒った」

「ほんと？」

「ほんと!」

今はもう何も言っても敵いそうになく、私はとにかく顔を仰いで平常心に戻ろうとしていた。

「いいじゃん。俺しかないんだし」

せっかく戻りかけた平常心が、また一瞬にしてどこかへ吹き飛ばされてしまった。

でも、今度はさっきの恥ずかしさとは違う。

無意識で無条件に受け入れていたこの状況。

それを意識してしまった途端に、ドクンと大きく胸が高鳴った。
胸が苦しい。

声も出せない。

もう無邪気に笑う水野君の顔は見られなかった。

「あ…いや、そういう意味じゃなかったんだけど…」

私の様子を見て水野君も気付いたようで、咄嗟に弁解したけれど、
もう遅かった。

それによって水野君も無意識だったものを意識してしまったようで、
お互いに視線を合わせられず、机に視線を落したり外を眺めたり
無意味に時間を気にしてみたり、色々なことをして、気持ちを落ち
着かせようとしていた。

「勉…」

「うん」

たぶん「勉強しよう」と言い掛けたのだと思う。

でも、私はそう言い終わる前に頷いた。

今日は勉強をするために来たんだ。だから勉強をしよう。

再び参考書と向き合った私は、そこに答えがあると信じて英語の長
文を読み解いていった。

最初は早かった鼓動もいつの間にか収まって、辺りは夕日ですつかり
オレンジ色に染まっていた。

あれから会話は無かった。

全然無かったわけではないけれど、分からないところを教え合う程

度。

それ以外はずっと目の前の問題集に集中して、良い緊張感の中にいた。

でもそんなにも長くずっと集中が続くわけではない。

集中力の切れた一瞬、ソレはまた私の中で燃え上がった。

ふと、視線を左下のほうへ落としてみる。

細く長い、でもしつかりとした力強さも兼ね備えた腕。

利き腕ではないその右腕をだらんと垂らしたまま、水野君は数学の問題と向き合っていた。

どうやら私の視線には気付いていないらしい。

でも、ずっと眺めていたらそのうち気付かれてしまうだろう。

私は一度視線を問題集のほうへ戻し、そして何を思ったか、

水野君とは逆の形で左腕をだらんと垂らしたまま勉強するふりをし、左手をおそろおそろ右手に向けて近付けていった。

手のほうは見られない。

見てしまったらたぶんこんなことは出来ない。

大胆になりながらも心臓は破裂しそうなくらいドキドキして、指先でそつと小指の先を掴むと、もう勉強をしているふりさえも出来ず、私は俯いていた。

ああ…。

やってしまった…。

びっくりしたかな…。

こっちを見てるのかな…。

今、何を考えてるんだろう…。

こんなことされて、どう思ってるんだろう…。

ああ…。

やらなければよかったかな…。

緊張と不安と期待と後悔が緋い交ぜになって押し寄せてくる。

自分から手を離してしまおうかとも考えて、でもそれも怖くて出来なかった。

私にとっては長い長い時間の後、水野君の小指が私の指先からすり抜けていくのが分かり、緊張が解け、不安が絶望に変わり、期待は儚く散り、後悔だけが残った。

こんな鮮やかな夕日にさえその暖かな色を感じない。

すべてが限りなく黒い、辛うじて白い光をまとったグレー。

しかし、そんな一瞬の出来事のその次の瞬間、私の世界は再び明るさを取り戻した。

すり抜けたと思った指が私の指に絡みつく。

その現実を一瞬疑い、でもされるがままにその一本一本の指を受け入れていく。

”恋人つなぎ”

最後にギュッと強く握り締められると、私の手も自然と握り返していた。

誰もいない、二人だけの空間。

二人を邪魔するものは何も無い。

そして、二人にはもう躊躇う理由も残ってはいない。

どちらからともなく次の言葉を発したその瞬間から、本当の物語は始まった。

好きになってもいいですか・・・？ エピローグ

”好き”

言葉にすればたった二文字。

でも、その中には無数のときめきと無限の想いが詰まっている。

そして、その気持ちに気付いたときから、毎日がとても楽しくなる。

私が彼を好きになったのはいつだっただろう。

図書室で手を繋いだとき…？

公園のブランコで喋ったとき…？

体育祭のとき…？

メールアドレスを交換したとき…？

修学旅行のとき…？

球技大会のとき…？

それよりもっと前…？

もしかしたら三年生になってまた同じクラスになれたときから好きになっていたのかもしれない。

でも、自分で自分の気持ちに気付いていなかった。

その気持ちに気付いたのは、私がインフルエンザで休んでいたときのこと。

私を元氣付けようと、裕子が学校のプリントと一緒に届けてくれた一枚の紙切れ。

四つ折にされたその紙は薄汚れていて、そんなものが書かれているなんて想像も出来なかった。

けれど、それが元々誰の物かそしていつの物か、私はそれを開いた瞬間に理解した。

”好きな人”

借り物競争のお題。

彼が手にしたお題。

本当はあんなことをするために保健室へ来たのではない。むしろそれは私のせいでああなってしまったということ。彼の気持ちを弄んでしまったていたのかと自分を責めた。

でも、こうして彼の気持ちを知ることが出来たのは嬉しかった。そして、その嬉しさが自分に自分の気持ちを知らせることもなった。

なぜ、彼が私を好きでいてくれたことが嬉しかったのか。

それは、私も彼のことが好きだったから。

そう気付いたときから、今この瞬間がどれだけ待ち遠しかったことか。

あくまでも私が彼の気持ちを知ったのは紙の上、文字だけの話。言葉やその声をもって伝えられたわけではなかった。

結んだ手から緊張が伝わってくる。

さっきまでよりも少しだけ声が震えている。

それは私にも伝染して、私も緊張して声も震えてしまっていた。目は合わせられない。

恥ずかしいし、そんなことをしてしまったら心臓が破裂してしまいそうだった。

けれど手は繋いだまま、私も彼も少し俯き加減で言葉を交わしていた。

「もう忘れちゃったと思うけど、俺達、幼稚園のときに会ってるんだよ」

「えっ？ どこで？」

「そろばん教室。公民館で習ってたでしょ？」

「うん。習ってたけど…」

「俺も居たんだよ。しかも、よく隣に座ってた」

そこまで聞いて、ようやく私は思い出した。

そして、デジャヴの謎もすべて解けた。

「水野君、全然変わってないね」

「思い出した？　って、そうかな？」

「うん。居た。いつも後から入ってきて私の隣に座る男の子」

「そう。それ俺」

「今日もそうだったね」

「え……」

「デジャヴだなあ……って。でもなんか聞き覚えあるし、すっごく気になってた」

「俺そんなに変わってないの……？」

「うん。全然変わってなかった」

思い出すことが出来て胸のつかえが取れた私は、椅子を少しだけ彼のほうへ近づけた。

「本当は俺も中学になるまで忘れてたんだけどさ」

「そうなの？」

「でも、初めて隣の席になったときに思い出した」

「一年生のとき？」

「うん。懐かしい感覚がした」

「そうなんだ」

「うん。でも確信したのは、左腕のホクロと傷かな」

「ああ……。これ……」

「ホクロだけなら分からなかったと思うけど、その傷は俺忘れてなかった」

私の左の二の腕にある5cmくらいの縫合痕。

それは彼が付けた物でもなければ、その傷を負ったときに居たわけでもない。

でも、たしかにそれはまだ幼稚園の歳の頃についてしまった物で、それを彼はずっと憶えていた。

「そろばん教室のときの子だって気付いたらさ、なんか色々思い出してさ。」

あの頃の気持ちも全部思い出した」

大丈夫。心の準備は出来ている。

少しだけ身構えて、でも、それを受け止めるための余裕を持って。

「初恋の子が目の前に居るんだって分かったら、もう無条件で好きになってた。」

もちろん今と昔は違つかもしれないけど、でも今の秋山も好きになった」

二回も言われたら、そんな準備は出来ていなかった。

射抜かれた私は、自分でも分かるくらいに顔を真っ赤に火照らせていた。

「俺じゃだめかな……」

「うん。そうじゃないよ。嬉しい」

「良かった」

「上手く言えないけど……」

「いいよ」

「私も、好きになってもいいですか……?」

「うん。なって。俺ももっと好きになるから」

「うん」

そして、ようやく想いは一つに重なった。

水野は繋いだままの手を自分の膝に置き、それからしばらく、二人

は静寂の中で同じ時間を共有した。

辺りがすっかり暗くなった頃、早希がふと思い出したようにあの四つ折になった紙切れを取り出すと、水野は思わず頭を抱えた。

しかし、早希は一度広げたその紙をクシャクシャと丸め、ゴミ箱に投げてしまった。

その姿に水野は一瞬茫然としたが、笑顔の早希を見ると納得し、自らも立ち上がった。

「私にはもう必要ないから」

「うん。俺もあんなのに頼ったからダメだったんだと思う」

「でも、強引な人は嫌いだよ…？」

「もうしないよ」

「うん。わかってる」

「暗くなっちゃったし、帰ろっか」

「うんっ！」

外の空気はひんやりと冷たく、すっかり冬の装いを見せ始めていた。しかし、二人だけ感じる温もりは何よりも温かく永遠を予感させていた。

好きになってもいいですか・・・？ エピローグ（後書き）

『好きになってもいいですか・・・？』は、これにて完結です。
が！ 続編の執筆はすでに決定していますので、これからも二人の物語は続きます。

ここまで読んで頂いてありがとうございます。

高校生になった水野君と早希ちゃんをどうぞお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4064q/>

好きになってもいいですか...？

2011年1月30日18時58分発行